







現代の美文

谷本とつむね

題言

星と董！二三の學生が寄り合つての評言が可笑しい。甲曰く、これはハイカラと訓を字よ。乙曰く、男と女とサ。丙曰く、戀と愛とのいひぞ。傍なる女學生のホ、と微笑みつゝ曰ひけらく、むらさきの色や床しき董！七夕の戀にあてがふゝひこ星！ア、これが星と董か、居士はいまだにその意を得ない、ト、低音拱腕考一考するに、三四者のこと其の趣味たるや同じである……が未だにその要領を解することはならぬ、ハテこれは……偶ま友人の松華老が音づれた、これ風竟と質したところで、先生ハ、ハ、と嬉笑するばかり、やゝ少時して、哀れや子も老いたりな、この世

には棄てられしか……と袂を探りつ、投り出したのが一書
冊子、取つて見れば甚麽に……星と董……
黙誦數十頁、嬉、愛、怨、情、戀、色、香、恨、樂、笑、
光、影、七情以外の情までも……而かもその言葉や香ばし
く、文字や美しく、星光！董色！……謝す、松華老
よ、予は今これを得たり、説の三四者の言も思ひ合され
て、その意味は正しく……ア、予も十年あまり若くなれ
り？
松華老が傳授の價、眞逆に○ではどの請求に、さらばこれ
なりとも……

明治丙午の暮も晩れなんとする日

蝶堂居士識

例言

一この書、題して「星と董」といふ、これを解すれば「男女
學生の友、友や交るべし、馴るべからず、求むべし、擇ば
ざるべからず、その寸法は、清き星の光、美しき董の色、
そが神々しきあたりに存せるを知らしめし。
一書中收むるところ、もとより清く美しくして、而も「現代
美文」の規矩の中に、人情の細膩をさへ味ふべく撰み著し
たれば、星の君、董の君には、掌上の清友たるべきや、手
前勝手なからに深く信ずるところぞ。

現代美文の星とすみれ目次

- 星と菫 一 △愛と情
 ○むらさき 三 ○夏の詩神
 △移り香 五 △月よ君
 ○現今の女學生 六 ○失戀
 △田舎むすめ 七 △仲國
 ○春の女神 九 ○小品數則
 △春菫 三 恩愛
 ○白百合 三 美人の勢力
 △白百合 六 加留多
 ○聲 五 △情緒
 ○戀 三 ○斷琴

- 三 上
 三 下
 三 ○戀しき君
 三 △紅芙蓉
 三 ○秋の蝶
 三 △薔薇
 三 ○春とわが世
 三 △ちる花
 三 ○くりごと
 三 ○いしとせ
 三 △きみがかひな

「挿むに「新体詩」を以てするもの、正しく俗治の情を驅りて雅純の境にいざはんがためなり、而も、その清新なるはたゞに香水を撒り散らして、當場の臭味を遺るのみにあらずるぞかし。」
 「頭首に短評を試むるものは、著者の興味に任せけるものとぞ、文中の點圈もまたそれよ。」

著者しるす

○人、而して男女	五	芳子より敏夫へ	五	○葉の莖	五
△逢瀬川	六	敏夫より芳子へ	六	△四季の風	六
△お花	六	△静夜思	七	○唱歌の聲	九
○ハイカラ先生	六	○清怨	七	△煩悶	九
○小夜嵐	七	△星の光	七	○愁思	一〇
△春宵窓	七	○産靈神の使命	七	△野梅	一〇
○子供ごころ	七	△胡蝶にまかせて	七	○玉章	一〇
芳子より	七	○幼兒	七	△若きおもひ	一一
敏夫より芳子へ	七	○人間	七	○花	一一
甲太郎より敏夫へ	七	△春野吟	七	○莖	一一
敏夫より甲太郎へ	七	○美しくしきもの	七	△月と鶯	一二
甲太郎より芳子へ	七	○螢	七	○思ひ出	一二
芳子より甲太郎へ	七	○破濤兄に寄す	七	△銀河の賦	一二

○雲雀	一三	○春の川	一三	○二人連れ	一五
○姉妹の戀	一三	○春の夢	一三	△忍ぶ戀	一六
△戀	一三	○飛信	一三	○艶聖	一六
△牧の子よ	一四	△君と我	一四	○冬の星	一七
○逃懷	一四	△鏡花水月	一四	○白芙蓉	一七
△秋の聲	一六	○別の記	一六	○忘れぬ草	一七
○繪葉書桐一葉	一六	△病める戀人	一六	△ひふく紗	一七
△蟲籠	一六	○吾をして	一六	○深山の奥	一七
○小品三則	一七	一より十二に至る (一五三-一五七)	一七	一より六に至る (一七六-一八〇)	一七
紫將軍	一七	△片身の小松	一七	△あはれ乙女子	一八
戀愛	一八	○笛の音	一八	○戀しい昔	一八
お月様は丁度	一八	△醜女歎	一八	○白百合	一八
△秋風	一八	△君と我	一八	○あはれ此花	一八

2 (3)

2 (2)

△ちる花	一八四	○て	ふ	二〇五	花盗人	三三
○秘めし戀	一八六	△涙		二〇七	天の星より	三三
○放蕩學生に興ふ	一八七	△きぬいと		二〇八	泣かぬ妾	三三
△まぼろし	一八八	○金水仙		二〇九	ゆかしい心	三三
一、二、三、	一九〇	○少女の初戀		二二三	△歌の一ふし	三三
○春の姿	一九〇	○白すみれ		二二三	○美音	三三
○戀の野守	一九〇	○若き怒		二二三	△惱める人よ	三六
○十六夜	一九一	△土筆		二二四	○川柳管見	三七
△をだまき	一九五	○古鏡		二二五	△殘雪	四〇
○鶯のおもひ	一九六	○櫻月夜		二二六	△紅梅のうたへる	四二
△星の露	二〇二	△邂逅	近	二二七	○蒲公英より胡蝶におくる	四二
△少女	二〇三	○文使ひ		二二九	△あこがれ	四四
○同情	二〇三	○小品三題		二三〇	目次終	

現代の星とすみれ

拈華散人著

○星と董

斯く題し來れば、現代の人には既に男……女……の代名詞てふことは、疾くこに首肯せらるゝところなれど、若しこれを現代以前の人に見せしむるも、その意は蓋し了解するに難かるべし、難きこそ當然なれ、星……董……といふそのものに就て、これが男……女……てふ意義を有するにあらざればなり、たゞ一ト口にいはゞ西洋より

必らずしも天保年代の人に語るべきにあらす

何んぞ廣義狹義の論を提出するの要あらんや

一言にして之を蔽はゞ同く戀のみ愛のみ。

新來せし文字否な意解にして、廣義にしては男女なりといへど、正しく少壯子女といふ狹義に解せるを當れりとするなり、すでに少壯子女といふ、星章の少壯學生、紫影の妙齡女子といふは、おのづからなる解義にして、天に麗く限りなきの星、地に匂ふ紫のすみれ、その間に幾多の戀……愛……これに伴ふ月……雲……鳥……蝶……およそ端倪すべからざる趣向の萌え出で、輝きわたるを知れば、そが情あるものをかい列ねて、星光董影の美を紹介せまほしと、筆を染めしまでなり、若しそれ星……これを牽牛織女の二星に見たて、董……これを朱を奪ふ紫に寄せんとならば、その影はいよく戀にその色はますく、愛に濃く映るふならんかし、いかにく。

○むらさき

赤、白、青、黒と敷多き色の中に、紫こそいと氣高く美しく見らるる。
麥穗浪よる畑のくろ、若葉涼しき木立の中、わけて古びたる小さき祠のかたへなどに、色もゆかりの藤の花、咲き亂れたるあやにかしこく。風吹き老ひし秋の野邊、見渡す限り草枯れて、薄、荳莢など乱れ伏したるあはひに、桔梗の二もと三もと、濃紫の色に匂える。さては訪ふ人もなき五月雨の日、佗しさに堪えで障子おしあけ、そことしもなく眺むる時、ふと池の邊に燕子花の咲けるを見出でたる目もさむると覺えてうれし。

朱を奪ふとて外々しう云ふもあれどまこと紫のやさしきはあるまじ

世に治容
などさげ
しみたま
ふな

烟雲凝り
暮山むら
さきのこ
ろ

新体詩中
の一体と
見るべけ
ん

未だ十とはならぬ女の子の、紫のふささげたる簪かんざししたる、いはん
方なく愛らしく。築山つきやまのかゝり、泉水の模様なべてならずおぼ覚ゆる家
のふみ石の上に、紫の鼻緒はなを立ちたるうらつけの置かれたる、いとゆ
かしき心地とする。

美しう咲きたる山櫻の、心短き春風のまに、空そらに知られぬ雪と
散るあたり、紫衣しゆいの僧たうす獨り佇める、何となう氣高く。夕陽ゆふひ漸く山の
あなたに落ちて、蟬せみの聲かしましき夕ぐれ、山は紫に匂ふて、淡うすき
蚊遣烟かやりばかりの交りたるいと神々かうくし。
さる人の紅は楊妃やうき、縁は袈裟けさ御前ごぜん、紫は紫式部むらさきしきよと云ひけむも理り、
げに神々しく、優やさしきは紫にこそ。

▲移り香

照る月はたゞき片沸く
鐵くわとる暇を暫しばばしとて
こゝは涼風やさしうも
孤島の王者ゆめみては
なみだに君を残しつゝ
のせて遙はるけき東路あづまぢに
友皆おこる時めきを
四年うらぶれ果敢はかな無も
椰子の葉かくれ月見つきみは

布哇はわいの嶋のむぎばたけ
椰子やしの木蔭こかげに息やすらへば
耳にさゝやくこひの歌
怪あやしうさわぐわか胸や
光明くわうめいに充ちし希望をば
輝かぐ雲いな趁おひにしか。
われのみ運命うんめい苦しうて
寒やうれにし身をはづかしみ
徐じゆろに君をおもふかな。

こゝ無限
のなさけ
こもれり

斯うばか
りはある
まじきも
悪しきこ
との耳目
に觸るゝ
こと多き
ぞ遺憾な
れ

潮はなさくおほやし
ま

絹淡紅いろの手布や

聞まはしと手に取ば

情をこめておくり來し

せめては君が優笑を

床し移香胸にしみ入る。

○現今の女學生

あゝ現今の女學生？

見よ、海老茶姿の彼等を、學業を勵み、徳操を修め、且つは男女同
權を口にする所は、適れ未來の良妻賢母の如く見ゆれども、翻つて
裏面を覗はん時は、げに驚くの外なし。然らば彼等は陰に何を演じ
つゝあるか、日々白粉の善惡、石鹼の見方、香水の嗅ぎやう、男生
の批評、艶書の認め方、これなり、換言すれば、男子に惚れらるゝ

法を終日考へつゝあるなり、要するに彼等内部の真相は野卑なりと
いふべく適當せり。

汝等女學生よ、情慾界を離れて一考せよ。

▲田舎むすめ

みにくきおのが容貌こそ　　み山がくれのくち木なれ
みにくきおのかころもこそ　　つとりの袖にも劣りたれ
わらひたまふなみやこ人　　こゝろははなにも錦にも。
花のかたちをかざり添へ　　にしきの衣裳着よそひて
みやこ少女はおはすとか　　朝なゆふなにさまぐの
をかしき事を見さゝつゝ　　みやこ少女はおはすとか。

都會の女
子、わけ
て海老茶
式部など
これを讀
みて如何
にか感ず
べき

田舎のさ
まのをも
しろさ、
いかで都
人に知り
わくべき
ぞ

たのしき中におひたちし

わびしき中におひたちし

知ろしめさじな夢にだに

とりの八聲におきいで

つちさへさくる水無月の

かせさねわたる霜夜にも

かばかり侘しき身なれ共

猶こもりつゝあるぞかし

みやこ少女のたのしびに

雲雀のうたふうた聞きて

みやこをとめの大かたは

田舎むすめのくるしみを

しろしめさじな片はしも。

なはしろ水をもりくらし

その日さかりも田草とり

くらき軒端にわらうちて。

くるしき中にたのしびは

けがれし塵にうもれたる

勝れる樂しびあるぞかし。

眞柴をりつゝかへりゆく

この心の
優しさこ
そ、得も
いはれぬ
趣のこも
れり

かた山かげのゆふまぐれ

いもとの土産に摘たむる

ふりつゞきたる五月雨の

山田のさなへうゑはて

森の木かげにやすらへば

○春の女神

雄々しき冬の男神、疾く其の征衣を收め玉へば、奇しき白雲の一片

二片、らしたき日影にふつくりと、小暗さまでに茂り合ひし神木の

梢にかゝれば、あたり只寂として、夜行く人の微けき足音程の音も

聞ゆる千仞の断崖、上平らかに、柔かき草生ひ茂れり。

おもしろ
き言ひが
かりかな

この光景
をなん、
春の長閑
けき姿と
も、影と
もいふべ
きなれ、
寫し出し
ていと妙
なり

遙に見やる南の方、一刷毛うすけに描きし苔とも見るべき山々の峽せきより流
れ出づる溪川の、二つ三つ集りて廣き野をうねり行く、其の川下の
僅に光れるをも指し得べし、点々たる村、平和にこもる人家の幾群
をも望み得べし、云ひしらぬ香、譬へば蓋うづまに渦巻く清き香の、いみ
じう人を酔はすよ、と見る間もあらせず、忽ち湧き起る奇しき望春
の神の曲、妙へなる響の、深山の微翠こたまに木響すれば、紫の幌とほりは垂れ
て、薄紅の羽衣輕う、綵綾のみ裳もすて長う、そと渡る薰風に絲遊と靡か
せて、今下りたゝすあやにかしこき、くはし女神の一柱。
女神は、聽て生絹の扇振り翳しつ。

『香は居すや、露は如何にせし?』と息吹きうるはしく呼び立て玉

紫なる雲
紅なる霞
は、神の
子にはあ
らずや

この一節
いかに妙
へなる言
ひまわし
かな

氣高き文
字、春の
女神の助

へば『應!』と答へて、御前に跪く美しき神の子二人、白羽負ひし
は露、黄なるは香とぞ呼ぶなる。

『今ぞ下界に春の望みの草々を植ゑん、露よ、香よ、植しべきもの
をや用意したる?』

女神、山吹の一枝をとりて立ち給へば、香は、眼もあやなる花籠を
露は、さゝやかなる銀壺を提げて、抱きて、羽風輕う、女神の後を
遙か麓の方へ。

若々しき野の氣吹に眼醒めたる野守一人、綠淺き春の花野に、暖き
日の光うけつゝ、ほろく〜とちり行く露の姿に、いしうも驚きの眼

けなるな
きにや

をみはりぬ。 (磯崎あさ子)

▲春 菫

薄紫のながそでに

ひばりの雛は汝が床に

楽しき春をしめなして

ながさゝやかき其胸に

さびしき野邊の草陰に

見る人なくてことし又

○白百合

昨日までは試験の草臥くたひれや、久し振りの歸省で、色々夜更よふかまで雑談し

あしたの風は緩ゆるく吹く

ゆふべの歌を歌ふなり

憂節うれせなげに見ゆれども

いくその思ひ包むらん

涙ふくめる花すみれ

春も今はとくれてゆく

何んぞ試
験やすみ
の草臥くたひれな
らんや

なから、ツイ寝過ぎたが、今は思ひ切つて早く起き出で、小妹の千代ちゃんを連れて裏へ出た、畑には作男の治助が丹精して作りあげた野菜が、心地よさそうに青々と茂つて滴したたるばかりの露をおき今にもこぼれそうである。

『アラ兄さん御覽！こんな美しいお花が咲いて居るよ』

と不意に横の小川のはとりで遊んで居た妹が呼んだ。

『何て花？マア白くつて美しい事！』

指さす方を見ると、夏草が青々と茂つて居る間に、一輪の大きな白百合の花が重たい露にうたれて、斜に咲き出で、その神々かろくしい姿を清水に映うつして居る。

小妹のた
めに見出
されし白
百合ま

しく彼女
は天使な
るらぬ

「兄さんこれは何て花？
百合の花に見惚れて返事をしなかつたので、小妹は再びかう尋ねた
のである

説き得て
妙

「コレは百合の花つてのよ、白いお召を着た女の神様が来て、お
休みなさる花だ

『ほしいのだけどね……姉さんはこんなお花がお好きだから、持
つ取つてあげると、きつと喜んで、奇麗に机の上に挿して、そ
の側で琴のおさらへをして聞かして下さるだけどね……』

小妹の思
ふところ
いと面白

奇麗にこの白百合を活けた机の横に、姉が琴のさらへをして居る側
で、うる覺の譜を、鈴の様な聲で己れの楽しい有様を、今少さな

しといふ
べし

胸に描いて居るのであらう

『わたし欲しいのだけどね……』

といつて、今更の様に惚々として眺めて居る。

一彩を施
したるが
如し

房々とした髪を肩まで垂らし、華手な浴衣をきた妹が、そのぼつち
りした黒み勝の目をみはつて、茫然として居る有様が、なんだか、
かう今百合の上に来て休むといつて聞かせた、あの白衣の天使が再
現したのではないかしら……と思ふ様な気がしたので、覺せず

『然し悪いことをする人は、それに手を觸れると、直ぐに神様の
罰があたるけれど、千代ちゃんの様ないゝ子だけは、それを
摘んで取つてもいゝの』

女あり玉
の如し、
その人常

に言はず
いはゞ必
らず人間
以外の春
を有せり

といふと

『そんならお爵が當りはしないの？』

『どうしてあたるものか、神様は千代ちゃんのような子がお好きだもの』

大事そうにつみ取つて、抱く様にして顔の傍に持つて行つたが

『イ、香だこと、兄さん嗅いでござらん……姉さんは、きつと喜ぶ』

は……

このあた
りは、當
代美文の
妙ならざ
れば能は

吾は只管姉をおもふ、このやさしい小さな天使が、つくづく可愛くなつて、矢庭に舞と抱きしめて、その桃のやうな頬にキッスをする
と、小妹は驚いて

ざるとこ
ろ

さもあり
なん、さ
もありぬ
べし

自然の景
にして描
し得ざる
もの

『兄さんどうしたの？もう歸りましやう、枯れるいけないから』

不圖見れば、一抹の朝嵐いつしか次第にうすれ行き、今までは曉の室に、只その輪廓のみを示して居た奇景は、漸次に翠滴るばかりの山となり家となり、杜となつて、晉つて摘み草に出て戀しき君と行末を語つた野や、魚釣りに出た川や、その舊知の山水はことごとくわが眼前に展開された。

夜は最早安息の職分を全く終つて、村の處々から起る勇ましい鶏の聲に送られ、今やこの平和の村は新に光明の主宰する處とかはつて只今までの夜の御手に包まれて居た山も生き、川も生き、野も生き、家も生き、あらゆる自然は皆いきくと活動の色を帯びて來たので

その樂し
さや想ふ
べし

白百合も
こゝに至
りて百歳
の眞知已
を得たる

ある。

白百合は直に妹の書齋に飾られて、やさしい香を送つて居る。あゝ
今夜は久しぶりに、一家團樂して、妹の琴の音に、合は小妹の歌を
聞きつゝ、楽しく笑ひ興ずることであらう。(美土路 醉香)

▲白百合

森の縁よ韻をまして
紫紺のみそら半を焦し
隨なる雲の女神乳色や
その綾羅の裳裾を長く
光彩宛ら火ばなの如く
日の神徐る西にしづむ。
濃き紫や紅染のにはふ
ひくよ歸るよ平和御床に。

をよろこ
ぶなるべ
し

雀はあな

聲!!、いかに種々なる、様々なる。

○聲

女神のまなざし霎時反く
俯き羞らう地の白百合に
地なる白百合の羞ふ影を
ながれて花野の土橋潜ぬ
妬のまなざし強く見下し
白百合の恨を暗に蔽ひて
今薄暗の幕ひろごりて
寂寥もるゝは美し白百合と
その間偷て日なる男神は
紅あまき情をそゝぐ。
漣かみしめて味ひ流る
その時男神は沈み了ぬ
かくて女神は裾輕らかに
慕ひて男神の跡に沈みぬ。
夜の精漸々野に満渡るに
遂に流水とその私語か
滴露

がちに騒
かしたも
限らず

可憐の女
や

騒がしきは喃々轉づる雀の聲。早苗取る稻田に噪ぐ蛙の聲。
紫匂ふ春の野邊に、優しき少女の手取り交はして蝶追ひつ、朗らかに歌ひ行く其聲。いかに平和に愛らしきことよ。
憐れふかきは、小夜ふけて、犬の遠吠も微かになりし冬の夜寒に、あはれ辻占賣る少女子の、憂世に一縷の慰安を得んとてや、高く叫ぶ其賣聲、寒む風に打ち顛ひつゝ……
砂明らか流れは清き谷川の水、靜かにせらるる自然の聲、さらさらと常久へなり。
青苔地に滑らかに、草生ひ繁れる破れ寺の夕、木魚の響きかすかに聞ゆる讀經の聲低し。

痴男女の
私語はそ
の憎さや
言ふべか
らず、公
園の捨椅
子なにと
にもこの
聲多し、
唾すべし
猶新新奇
接たる聲
のいと多
きを聞か
ざるにや

月影淡き春の夜、稻荷の森の邊り、燈籠の後、朧ろに佇む二人の影見えて、遙かに聞ゆる私語の聲は、いと心憎きものとぞ。
慾張老爺の破鐘聲と、安芝居見に友呼ふお轉婆むすめの金切聲、そは嫌なもの。
みなよきものは音樂の聲。
朴々たる頬冠姿の馬子が道行ながら歌ふ追分の聲。
軍國の國民か、その戦捷を祝して叫ぶ歡呼の聲は、いと目出度きものなれども、亡國の憤りを叫ぶ民の聲、そはいと哀慘なるものよ。
この篇は前田星影氏のものせしを節録せしもの、著者は更に下の數句を添へんとす、いかに……

この心誰
にもあら
ば、戀は
無情なら
ざるもの
を、ア、
さても

いとど生意氣なまじきに聞ゆるものは、年少き男女學生が、星よ……董よ
……と呼ぶその聲。
いとど楽しく聞ゆるものは、青麥の浪だつ空に、告天子いはりのところ
もさだかならぬあたりせはに聲立つるもの。
いとど急せはしきものは、汽車の時刻を知らず鈴の聲。

○戀

われをば慕ふ人もあり
慕へどさくる人もあり
きたるを招く尾花あり
手折るを拒むばらも有。
拒むばらをは振捨て、
招く尾花をとらんには
あらし磯べによる貝の
我のみ碎く身もなさに

とらん哉とは思へども

とらぬぞひとの心なる。

▲愛と情

かつはり多き世の中に
ひとはうらみを免れず
悪魔のさそふ世の中に
人は迷ひをまぬかれず
さはさりながら我身には
愛と情のたすけあり
たとへいつはり多く共
情のつゆのそゝぎなば
うらみの燄消え失せん
たとへ悪魔はさそふ共
愛の光り照らしなば
迷ひの雲やはれゆかん。

(海老原容)

○夏の詩神

菜の花をめぐりて、追ひつ追はれつ、舞ふ二つの胡蝶、いつしか佐

迷悟の人
果して幾
何かある

その迷ひ
の晴る、
ことを得
べきや

眞乎天地
の微妙

このあた
りの情緒
は、寫さ
んとして
寫されず
言はんと
して得い
はれぬと
ころ

保姫の道しるべして、山深くかくれ、夏の詩神ひとり花なき小川の
はとりを辿りゆく、谷をながるゝ水の聲、天地の美妙を歌ふ雲雀の
聲に胸をやうたれけむ、木蔭にたゝすみて華書の夢を貪るに似たり
水際に咲き残れる薔薇の花一つ、影もかすかに水にうつり、薄紅梅
のかんばせに、色を映せし愛らしき友はうせて、同じき床の上に眠
らんとする風情なり。神はしばし水汲む手もたゆたひて、褪せゆく
花を物憂げに眺めたり、愛の宿れる精神には必ず熱あり、血涙多き
詩神は、如何にこの人生最美の花の最後を悲みしか、幽かなる聲に
て、『人の一生はこの花の如し、青年時代は花の春なり、青年は春
の花なり、人生の花の春に遭ふ人、この哀なる薔薇の花に、一掬の

まだ人の
いひ能は
ぬおもむ
き

自美より
來りしも
の、眞乎
天籟

涙をそゝぎ、深き眞理と、人生の思想とを悟れ』と、残りの言の葉
は夕雲にかくれ、夕日の影うすあはく、オレンジ色の月はのくくと
東山にあらはれ、蝙蝠二つ三つ、月を囲んで飛ぶ、風に流れて螢の
三つ四つ、光幽かに飛ぶいつしか夜も更け、鎮守の森の常夜燈の光
もみぬすなりぬ、神は歌口に薔薇を刻みし銀笛とりて、神々しき月
に向ひて薔薇の一曲を奏しぬ。山も水も、野も里も、いと静かに
すみ、涼風ふき來りて、夏の詩神もいつしか影も見ぬす、残りし薔
薇の花も流るゝ水の床に眠りぬ。(池山 露泉)

▲月よ君

山をとよもす雷の音

篠つく雨の音やみて

この心を
有する人
は、たゞ
作者それ
ばかりな
らで

千古の知
己も、時

に盈缺あ
るを、そ
は君いか
に見るべ
き
かくて月
月はこの
誓ひをゆ
るすべき
や

一として
悲歌なら
ざるはな
し

行交ふ雲の絶間より

あゝ月よ君清らけく

わか胸おほふ雲霧は

思ひ出ればのどかなる

酌みかはしたる杯に

庭のも深くみづ枝さす

歌ひし夜半の袖の上に

あゝ月よ君さりながら

樂しき昔かもひ出の

あゝ月よ君心あらば

洩てさやけし月の影

冴けき君を見るからに

はれて跡なく成に鳧

花の木陰にまどわして

宿りましまも君なりき

若葉のかげにわが友と

宿りましまも君なりき

今のうき身に比べては

夢路はさすが苦しきを

せめて哀れとみそなはせ

廣きこの世に君を置いて

思へばながき今よりの

うれしき春も憂き秋も

世にある習ひいつか我

やさしき君が光りもて

あゝ月よ君われのみか

ふみゆく道を照しつゝ

語らふ友もあらぬ身を

わが世の限りとしへに

かはらぬ友は君ひとり

つらき運命に泣もせば

とはに慰めたまひてよ

憂ひになやむ若き子の

導きませなとことには

○失戀

夜色秋光ともに一闌、飽き收めて風露脾肝に入り、詩魂まことに聖し、そとろに涙を拭ふて臥床に横はり、戀の反古紙を展べてひとり

多く讀む
にたねざ
る懐ひあ
り

紅情をしのばむとする刹那、忽ち秋聲に和す急砧きむらひの音、更に一片の雁聲あり。

愁ひにたへず、馳せて高樓に登れば、月を浴びたるイルミチーシヨンの都を挟みて、西に仙客の富士、北に禪僧の筑波。

瘦影さういいたく震ふて、唇頭一味の清に酔ひ、涕の睫せまに交はるを覺へず復つて幽窓に座せば机上に在りバイデー一卷。

あゝ失戀は、洵に人生の悲劇なるかな！

わかきクレオンは、花のごとき姪アンチゴンをしたひ、熱血をそゝぎて婚をせまり、拒絶の不幸に逢ふて、熱涙雨より滋しげく、漣然れんぜんとして哭なぬ。

期くおも
ふは人情
の常なり
しかも

希はくばその嘆聲を聴かずや、『あゝさらば地獄に行て妻を得んと、辭何ぞ一に悽慘なる！』

焦思せうし幾回年、胸裡に燃ゆるものは、火か、靈か、しかぶ巫山ぶざんは却つて爐峰なと作り、雨に非ず、雲に非ず、たゞこれ烟なるに至つては、あゝ誠に悲慘の極みならずや。

國を傾け、城を傾くるも、戀を獲れば乃ち佳なり、富を得るも、名を得るも、戀を失はば、慥かに傷心の事に屬す。

我等の祖先、エデンの園に於て、一たび情を犠牲となしてより、年々歳々、罪の冠を奉戴し、偽醜ぎしうの巷に迷ひつゝ、晨夕戀の苦闘くとうをこれ事とす、而も之を求めて笑ふ者いよ／＼少なく、之を逸して泣く

終に戀之
奴隸とな
るにあら
ずや吁
偽醜の文
字いとお
もしろし

かくの如
き男女子
は、恒心
なしとい
はんか、
志望乏し
きものど
いはんか
かれは興
せざるも
のよ
失戀もこ
こに至り

者ますく多し、あゝ失戀は永遠悠久に悲劇たらんと欲するものな
るか。

女子は蛾蝶の如く、光華の爲めに捉へられ、男子は情愛に酔ふて伉
麗をなさんとすと雖、蛇忽ち來りて魔を叫くに至つては、眞に慘の
慘なるもの、吾人涙闌干たらざらんと欲するも得んや。

あゝ、失戀の悲劇史を讀んで、たれかその慘なるに、慟哭せざるも
のぞ！

妾心や素を洗ぐが如く、郎心や紅を洗ふが如し、素を洗けば素いよ
く白く、紅を洗へば、紅漸く空し、思ひ千戀、また無限の恨、深
閨徒らに風の冷かなるを知るのみにして、更に眉を描くの勇なく、

て極れり

と云べし

いかにも
失戀の人
となるな
かれ

形容枯槁、顔色憔悴、洵に失戀の悲劇に泣く。

解語花は開きて南枝に在り、香魂千里、才子春風に乗じて之を折り
明鏡となつて嬌面を分たんと欲し、輕羅と作つて細腰に著かんと希
ふもの數次、而かも一夜の風雨情を解せず、魔手を延べて美を碎き
去る失戀の悲しみまさにこの時に存す。

嗚呼、佳人の美や、玉よりも美にして、玉の如く破碎し、才子の命
や、雪より薄うして、雲の如くに晦潜たり、運命是なるか、愁ふる
者非か、抑も亦人生の弱さが爲めか。

希くは問ふ勿れ、英雄天才の失戀史！、凄氣楮上に溢れ、慘氣紙面
に満ち、讀者の眉爲めに縮んで、涙涕やゝもすれば泉の如くならん

かく多情
の人に
てこの失
戀を賦す
その傷心
の情は肺
腑より出
でしを覺
ふ
餘情亦綿
々として
盡ぎざる
ものに似
たり。

と欲す。

行宮月を見る傷心の色、夜雨鈴を聴く斷腸の聲、英雄朝々暮々の情
に堪へず、戰袍盡く露^{ふるほ}ふて色轉た褪せり、劍折るべし、血^す歎るべし
戀を失ふて何の快樂ある！

雲は衣裳を想ひ、花は玉容を思ふの佳人去つて、我恨愁の情眞に纏^て
綿、魂魄迷つて其面影を趁ひ、餘情孤影徒らに離鳳を悲しむのみ、
硯碎くべし、筆摧くべし、戀を失ふて何の快樂ある！

嗚呼、失戀史のページを繰つて、哭^なくべき乎、笑ふべき乎、天長地
久、盡くる時ありと雖、其の恨綿々として絶ゆるの期無し矣。
想みだれ、愁しげく、つと靜かに欄干に倚れば、秋聲覺むるに處な

くして、滿階の梧葉月明の中。(久木哭秋)

▲仲 國

駒もしるらしたてがみに

丈のすゝきの穂やたれて

しとと露ちる御なやみ。

小鹿ばかりのさゝやきに

いらへますらん十三絃

耳かたむくる狩衣の

袖の白彩風くらし

院南殿にしづまする

やよいたはしの面かげや

入道淨海金冠の

榮に驕りて雲上の

光輝を消すに何事ぞ。

尋ねわびてし龜山の

こみちの草に駒とめて

繪にかい
たやうに
おもはる
これあり
ていとお
もしろく
見らる

仲綱苦心
のさまい
とゞしう
おもはる

想夫憐を
絃に奏づ
るところ
その情や
溢れたり

ゆるめし手綱すげなうも

春を絶たたるふん姿

髻切つてわれはしも

枝に梧わにあらしく

花とちるらむみだれ星

百里の千草ゆるがせて

怨の絃にさまよひし

涙のたまのくだくるよ

み歌のかへしきこねすば

露ひやうかのつちならめ

松の木やみをみあぐれば

天宮かろすあさ風や

絶たつ縛れつ千條の

靈の曲かや想夫憐(せうつ)

○小品數則

恩 愛

自分は、ヒヨンな所から遊蕩三昧になり、父も大目に看過されず、

その金を
以て、ま
た遊里に
さまよふ
こと莫れ
や

到々勘當となり、何でもかでも家を出なければならぬ其晩。母が自

分を一室に呼び、『若い時は有勝の心得違。すぎ好んで勘當なさる

のでは無い、之もみんなお前の身を慮つてなのだよ、一角いっかくの職を覺

は、一人前に成つて来てお呉れ、當分の旅金に……』と、一包の袱

紗を前に出された。開くとニヨコリ大黒紙幣二三枚。『此こゝろに澤

山……』未まに忘れられぬ。母は目に涙が一杯『シッ!!! 静しずかに。も一

遍顔へんげんを見せてお呉れ(村中)ッ(靈外)

美人の勢力

故に、古
人曰く、
『ウヌ濛六め、此の月夜に衝き當るなんて、此の疵を見ろ!!』書生
の膝よりは鮮血一滴二滴又一滴! 老車夫は平身低頭、頻りに謝れ

へび喰ふ
と聞けば
恐ろし雉
の聲

ど聞かばこそ、今にも鐵拳かと思ふ折しも、窈窕花の如き妙齡の美人、やをら車より下り來り、軽く一禮して「貴郎本當にお痛う御座います、何卒堪忍遊ばして！」と、嫣然一笑すれば、先生「いや何に是位の疵は……ツイ僕が酔つて居ましたから」と、軽く答へて一歩は高く一歩は低く、醉歩踰跟と立ち去りぬ。跡には「本當お前にも困りますよ……」と、劍もほろくの御叱聲、吁恐しい哉美人の勢力。(日野紫萩)

加留多

イヨ一三
輻對、而

海老茶女王の左右に、自稱豪傑と、自稱紳士とが陣取つて、時こそ來れと待顔なり。

して鹿は
誰れの手
に落るを
らん

俄然「なげ」として月やは物を……刹那三者の手腕は、女王所有の札に落ちぬ、結果札は豪傑の腕力に抜かれぬ。女王嘆ずらく「あらひどい、自稱紳士同情すらく、「けがはしませぬか」自稱豪傑喝すらく「やかましい」讀者ちやかすらく「小倉山みな心の心あらば今一度の喜劇見んかな」(長谷川皎雪)

▲情 緒

いかにも
よろこば
し
お腹の立
つ顔色は
わが癪の
種なるぞ

君よろこびの頬の邊に
園生に咲ける花薔薇
君がいかりのまなじりに
月日も消ゆる心地して
ほのかに染めし色見れば
われ香に酔へる思ひあり。
世を甲斐なしと眺むれば
われ夜に惑ふおもひあり。

無情多恨

亦幸運な
るかな

おのづか
ら和かな

さなおも
ふも無理
からじ

捨つべし
拾ふべか
らず

君かなしみの黒髪に

夕べしぐるゝ深山路に

君たのしみの聲さよく

千代を壽くさく酒

君愛を知る目のひかり

希望をさそふ朝の日や

君がにくみの唇に

神の御前につみの身の

君物もとむ眞玉手を

珠だにさぐる志度の海士

かざしの花のしほるれば

われ行き悩むおもひあり。

妙なる歌を誦するとき

われあくがるゝ思ひあり。

くしく涼しくかどやけば

われに嬉しきおもひあり。

ありしゑまひの消るとき

われおそろしきおもひあり。

心ありげに延べむとき

われ身を捨てむ思ひあり。

戀人として
油断すべ
からず

われ戀すてふ君なれば

美しきかな花よりも

七つの情とりぐくに

清らけきかな月よりも。

○断 琴

上

今晚から小六ヶ敷い法律書なんか讀んぢやあ居られない、どれ一つ
散歩をしよう、尺八腰に差し込んで、ぶらり借家を出た。

友人をお
もふの情
は、綿々
として断
へざるこ
と縷のこ
とし

「眞國に宜い月ですなあ、頼種君も今頃はこの月を、野營を張つて
見て居られるでせう」。

餘り廣くはないが、趣味ある、庭の築山泉水の邊、彼方此方打廻つ

ア、長恨
歌、あに
がために
この長恨
歌を吹奏
するので
あらう、
想ふに常
に厭世的
の人なら
む

て、澄渡る月に憧がれた僕は、やがて縁鼻に腰打下ろして、澁茶に
喉を潤はした。

絹張の團扇を左手に、端近う居坐つて、そよ／＼と風を送つて居た
主婦の光子、つゝましげに首肯いて

『大方好みの長恨歌でも吹いて居るでせう、』

『は、どんな事があつても、玉の緒のさされるまでは、是計りは放
さないと申して、大切に携つて参りました』

自分は言知らぬ感に打たれて、

『風流ですな、眞個に新羅三郎が昔の事も思ひ出されるです、頼

種君が例の名手でもつて、月下に一曲吹奏したら、恐らくは三軍
の腸を断つでせう』

『まあ何うですか、吹いて居る暇がありますかしら、夫れでも先日
の書面には、北が晴れて居たら此の地の方は宜い月夜だと思つて
お前は一人で琴を弾け、乃公は此地で笛を吹かう、さすれば合奏
も同じ事だと、こんな事を申し参りましたんですよ。』

『面白いですなあ、英雄の胸中閑日月あり、宜くいつたものだ』
と、僕は更に感動した、

月光いよ／＼皎々。

下

風流士官
なるかな
斯くてこ
そ眞の武
士なるら
め
然り／＼
閑日月あ
りといふ
べし

婦人と合奏を試むるも、その友を偲ぶの餘りにいでしなれ、讀者必らず仇し目に見るべからず

『それぢや斯うしませう、貴婦と合奏といふ事に』
『まあ、迎もお相手にはなれませんわ、は、夫れでは』
團扇を離して、つと立つて床の間から、持出た吾妻琴、曲はお定まりの長恨歌！

腰の一笛抜取つて、我れまづ歌口を濕してかゝれば、彼女は肅然と爪調、月いよく、冴やかにして、夜はいとどしく靜かである。
今は昔もろこしに

と徐ろに奏し始めた。よしや我には入神の妙なくとも彼女は正に出藍の響れあり、憂々の音は瞭曉の音と相和して、一場一抑、或は急或は緩、曲一曲と進むにつれ、我もなく人もなく、冴ゆるしたる

音色のそれのみ、悠々と澄み渡つて

散りて色香もなき魂のありかをたづね水馴棹

のあたり、節細やかに調高く、あはれ波濤万里を隔てし彼方の空に通うて、心ある人の耳にも聞こゆらんと思はれたが、曲は進んで

相見ん事も蓬が鳥つ鳥、浮世なれども

戀しや昔、戀しや昔……。

と奏でた時しも、鳥の悲鳴のそれかとも怪しい音がして、ふっつり箏の緒は断れたり。

はつと思つて自分も其音を止めた。

『ま、何うも失禮しました』。

これこそ士官が戦死の報と見るべしア、さて

その人戀し、その人は亡し、その月は残り、その琴はこゝにあり、夫人の情やいかに堪はざるらめ

と光子は、何か遽しく起上がった。

『切れましたか』

『は、絃は昨日代へておいたのですに。』

とばかり心元な氣に、密かに重い息を吐いた。

唄の意と其の身の上、昔戀しや、戀しや昔、浮世なれどもあはれ疇昔のむかし戀しと、切なる思は調の上にもあらはれて、爪に力の籠

つたのではあるまいか？

月の光りは庭木に遮られた。

斯くて自分は合奏を了へて、歸つたが、其の夜は何とはなく胸に哀

れが染み入る様に思はれたのである。

風流士官と名を唄はれた、親友中村頼種君が、去ぬる南山の激戦に

名譽の戦死を遂げたといふ事は、自分が光子の家を訪れてから、七

日目に聞知つた。

伯牙が昔のそれではないが、光子の箏は長へに、再び音を立てぬで

あらう。

するとくと、

自分が秘藏の尺八も、あゝ誰れと合奏することが出来るのだらう、

あゝ誰れと。(室谷氏)

○戀しき君

戀しき君とそふからは

九尺二間のうら長屋

正しく死を甲ふの情緒ふかきものならん
君も尺八を割つて奏することを止めよかし

これ土井
椿水生の
ものせし
どころ、
鄙俚の新
体詩に入
るもの、
もとより
詩そのも
の、雅に
乏しとい
へども、
そのあり
のまゝを
寫し出せ
しあたり

破れ御膳にかけちや碗
何ぞいとはん諸ともに

戀しき君と添ふからは
草をしとねに臥とても

何ぞ厭はんもろともに
戀しき君と添ふからは

三途の川をわたるとも
何ぞ厭はんもろともに

あゝ戀人よこひびとよ
少しは御察し下されて

たとひか粥をすゝる共
差向にて座すなれば。

たとひ野の末やまの中
岩を枕にねるとても

同じ臥床に就くなれば。
たとひ火の中水のそこ

蓮のうてなに座るとも
手々引合ふてゆくなれば。

斯ほどに思ふわが心
色よき返事たまへかし

亦頗る當
代に用あ
るものと
す、

新題目詩
に入る、
その風趣
いと妙な
り

御願ひ申すかみはとけ
妾が戀をとりもちて

● 南無や出雲の 大社

▲ 紅 芙蓉

神のみ園に秘めませし

芙蓉の紅の酔ひこゝち

與へし露のゑむらしき。

胸に映らばあたゝかく

かの幻ともたゆらむ

星よ幽かにやどりしは。

正しく誠しりめさは
君と添はして下されや

南無阿彌陀佛南無阿彌陀。

酒の雫やそゝぎけむ

葢新らしきいのちをば

若き血しほの燃ゆる狂ひ

唄さあひてうすれゆく

この一句
いと清き
趣きあり

紅なりと
て、何ん
ぞ妬どの
み言はん
や
輕妙意味
言外に長
し

詩なり畫
なり、畫

白かね細きさつ矢もて

熱き胸をば射ぬくべく

神は聖きにあたへたり

蛇住む甕の毒しるを

塗りて放てと賜ひしや。

妬みの炎いやたかく

戀の罅間に咲く百合の

匂ひは空にかへりつゝ

吁げにや斯く沈みゆく

戀は塵にぞまみれける。

あゝ紅芙蓉濃く染めよ

酔ふに畏れはさてあらじ

淡きは星のあかつきの

運命ひと時さもあれや

ほゝゑむむにしひと知らず。

若きを榮とまたける

星よゆくへは何處ぞや

なり詩な
り

彩雲とほく湧くところ

東の波にひそむとも

またの宿を夢な忘れそ。

○秋の蝶

秋たけぬ……。

秋野の景
を叙する
あたり、
いと美妙
の筆とや
いはむ

野邊には芋々たる草生ひしげり、美しき萩、高き女郎花、さては桔
梗、尾花、とりくくの彩色を放つて、秋光の哀れを粧ひつ、朝な夕
なに吹きわたる風は、蕭々として冷やかに、玉とおきそふ美しき露
も、あはれやはろくとみだれ散るなり。
あゝ、この寂たる光景の中に、一しは憐れなるは、かの胡蝶にあら
すや。

この一章
ありて、
いと婉麗
の趣を添
ふるをお
ぼふ

驟の春秋
は、人世
の營枯に
おけるが
如し

方今の詩
人や畫工
や、や、
りすれば
理想の美
をのみ趁
ふに似た
り、いか
にく

沙羅双樹の花の色は、盛者必滅の理をしめすとかや、あはれ蝶！、
汝もこの理りを哀れと思ふか、はた、紅樹葉空しく落ちて聲なく、
律の蟲の音絶へくになりゆくを惜しと感ずるか、その弱りたる翅
を溟渤の風にまかせて、いと力なく花野をさまよひゆくよ。
さらば、せめては秋の名どりに、汝が堇の床にむすびたりし春の夢
を物語らすや。
嘗て、彩霞たなびくうらゝかの日、ミューズのみ神の恵をうけ、美
しき天使と化して、紫の帷句ふ山や野に舞ひたりしこともありしな
らむ。自然からだす美の影にあてがれて、清き花の香に酔ひたりし
こともありしならむ。春の榮華、今はそも何處にかゆきし。

嬋妍たる容姿を望みて、詩人は『美の神よ』と讚美の詩を歌ひき。婀
娜たる嬌態を眺めて、畫工は『天女の舞よ』と微妙の筆を揮ひき。今
はたいづこ去つて亦その影を認めず、無情ならずや。
蝶よ、詩人、畫工、今は來らず、野邊はいと淋しとて、友なき無情
を恨む勿れ、無情なるは浮世のならひ、現の世、誰れか涙あるもの
ぞ。試みに、汝が清き胸をやすめて、人の子の情やいかにと考ひ見
よ、かの『理想の美』てふ假面を被りたる詩人、畫工の心は、濁りた
る水に侵されて、觸れなば刺さむ薔薇の戀に迷ふなり。されば、一
度は汝が美のさまを歌ひ、畫きたれども、いかで永劫にその生命を
味ひ得べき。只皮相の涙に過ぎざるなり。想へば、畢竟そは詐りの

秋の蝶も
この文を
得て、そ
が不幸を
啣つこと
なからま
し
し

聲ならずや、詐の筆ならずや。
腥まなぐさき人の血、その色褪あせたる羽袖を汚さず、鏡かがみき人の情、その澄すみ
たる心に入らず、権力、榮華の幻影げんげい、その愛らしき眸ひとみに映らず。秋
の野を人訪はぬこそ幸なれ、福なれ。かくて、眞率の自然が賦する
所に任せ、秋風さむき野の殘花にとりすがり、そのまゝ、ゆたけさ
永遠の眠りにつかむとす。
オ、秋の蝶よ、榮はな多はきかな、幸深さちきかな。
心おきなく逝ゆけ……蝶よ……
野菊の一枝は、麗うつくしき終焉しゆうえんの香を送り、白露の一滴はゆかしき手向たむけ
の水と匂ふめり。

一篇秋蝶
を甲ふ文
と見るべ
し

汝の形体はこれより惨なる雨に曝さらされて朽くちむ、されど、惠深めぐき美
妙の神は、紅紫さらめくエデンの園に、玉の壇定めて汝の靈の來る
を待らいまさむ、うなひの草笛を喜びたりし汝は、やがて、妙なる
天の琴曲に、その靈を慰籍いしやするに到らむ。
秋の蝶！、いかに優秀なることよ。

▲薔 薇

薔薇の眞
美といへ
るは、白
きにこそ
あるめる
を、こゝ

置きし白露かほらせて 唐くれなるの花びらに
柴の小垣をうづめつゝ これ見給への花うばら。
女神の御手に抱かれて 小こさささき唇くちほにたゝへ
さゝやき笑ふみどり兒の 愛のくちびろそれなるか。

には紅き
ばかりを
詠みてけ
るはいか
に
これをや
人を喜ば
すものは
人を毒す
といはま
し
それ然り
豈にそれ
然らんや

年々歳々
人同じか
らず、い
かに春ば
かり移ら
ざるもの
よ

しばしゆるせよ其膝と

想に燃ゆるをとめ子の

非ずあらずさはあらず

酔をすゝむる香の下に

とみれば艶の色なれど

腐れはてたる塵の世の

嵐をはらむくもに驅り

此世を呪ふまつかみの

思へばうとき花うばら

ふさはしさとして咲しゝか

戀しき人により添はん

血汐の色かこれならむ。

見れば可憐に飛ぶ蝶に

鋭きはりのひそめるよ。

あまりに紅きその句ひ

おそき汚れや潜むらし。

つるぎと征矢と携へて

火炎の息もこもるらむ。

虚偽をあやどる人の世に

神の心をさかまはし。

○春とわが世

若き力の蘇へるべき春はわが世に歸り來りて、天地は美しく彩られ
たり。

春の光の照らす所、草は萌え、花は咲き、鳥は歌ひて——空を望ん
で湧き立つ泉——希望を浮べて寄せ來る潮——呷きく奔れる流：
あゝわが世は何處か、愛の光、望の影、活動の姿、歡喜の色の溢れ
ざるべきぞ、徒に青春老い易く、流水去つて歸らざるを説くこと勿
れ、『伊昔紅顔美少年』と嘆ずるを休めよ、今やわが世は美しく復
活したるなり、人はよろしく老いも若きも、花の如く泉の如く、潮
の如く微笑み、歌ひ、勇みて、望と、愛と、活動の人たるべきなり

春の女神
もさぞ満
足にやあ
らむ

微細なる
ところ、
一々神に
入れり

春は曙、東天はのぼのと白みて、紫の御袖空にはのめく頃こそ、いとも心ゆく極みなれ、試に高さに上りて曙の春の姿を觀よ。茅屋三四点花に抱かれて、人の子の魂は未だ聖きその夢路より還らず、風もなく聲もなし、幾億方の星の子は、父なる晝の光を怖ぢてか、母なる夜の懷に隠れて、何處ともなく落ち行さし、天も地も、森も牧場も、野邊も、おぼつかなき吐息のやうなる靄氣に打ち薫じて、糺糊たり、縹紗たり、天も、地も、我も一に歸して、こゝ夢のやうなる春の曙は生れし。

更に見よ、朝靄は刻一刻薄れゆきて、東の空紫の帷揺られけり。彼方鬱金染の菜畑の裾に、白き扇を開きし如く見ゆるは春の海なり

高きとこ
ろより見
渡したる
眺めの美
これほど
までにも
なきやう
に思はる
を、正し
く詩神の
美なるも
のならぬ

聽け、遠く響ける海の歌を、今ぞ新らしき春の潮は、光と雲と競ひ走りて、今日の天地の新らしき生命の福音を齎らしつゝ、曙の夢を醒まさんとするものゝ如し、かくして人の子は夢より蘇り、長閑なる春の日は生るゝなり、

あゝ、春の美！ そはまことに情と、生命と、詩歌の神の如けん、今吾れその温かき光に觸れ、溢るゝ微笑の甘さに酔ひて、過去を忘れ、將來を忘れ、我を忘れて、心只春に在り、あゝ翼もかな、々々々々、願はくは、この嬌々たる春風を斜にうけて、東溟を越えて飛んで行きたし。

想ふに春は愛なり、そは永遠との融合なり、万有と共に愛の中に融

いかにも
愛なり、
愛の春な
り、春の
愛なり、
いつまで
も易らざ
らましを

今少し氣
の足らぬ
心地せら

け、心靈たゞ天地の大に合するものは春なり、董も、泉も、小川の
流れも皆春の愛なり、微笑みの言葉なり、春の接吻なり。
さはれ、はや春は行かんとするを、花よ、蝶よ、夕べの雲よ、せめ
て余をして憧れの翼を伸べて、愛を追ひ、光を辿り、宇宙の大我と
通せしめよ。
あゝ春は静かに行くよ。(小澤白絃
節録)

▲ちる花

夢よりあはく散る花に
夕べの窓によりぬれば
春の日沈むさいうんの

書よむことの物憂くて
空想に耽るまぼろしや。
紅ははねある色なれど

れど、
散るてふ
花に心を
よするさ
まは、い
どいみじ
き限りな
れ

末の二節
が、この
題の主な
るところ
ならぬ

それよ瞬時の燦然に
効くてらすゆふばしは
詩にやつれしわが頬に
人のこの世に生るゝは
われ今何のつみありて
世に秀才とうたはれて
社會の逆しほに漂泊て
人の運命のおはるごと
薄光さびしき夕風に
神や諭示のこゑならん

知らずや闇の襲へるを。
深くひとみに刻むらむ
髪はおどろと亂れたり。
自然の愛子を生るなり
憂愁ある子と生れけん。
詩にあそびし若き身を
わすらひ多く老しかな。
夕日をおほふ暮のもや
祈禱のうたも力らなし。
胸の小琴にひびきては

木梢はなれて散る花の

音をば聞くに紅堪んや。

○くりにごと

霜をふみて堅氷いたり、もの腐りて虫これに生ず、花は春をまちて開き、鶯は花の開くをまちて囀す。天下のもの豈に本末なからんや。豈に原因なくして結果あらむや、余は霜ふれば氷り、春來れば花咲くを知る。知らず今日の女學生が、紅粉をよそふの極いかなるかをあゝいかにせむ。

容をかざるは、姪をうるなりとは、果して後生をあざむかざる格言なるか。欺かずとすれば、今日の女學生中、面に粉し口に紅するの徒は、みな姪をうらんとするものか。噫

女學生は日に三誦すべきなれ

このあたりに餘り過ぎたるやうなれど、去り

とて空しからぬふしも多しとかや、一針とな思ふがまゝに

よくこれを服膺せば、身をあやまることなからん

咄。何等の徒ぞ。夜中妙齡の婦人の通行するをみれば、これをとらへ、寄席に行かずや、料理店にのぼらずやと。甚だしきは、人通りすくなきところまで躡し來ることのありと、咄何等の徒ぞ。余輩はかゝる徒の一雨毎に多くなるをきゝて、道德其者の東洋の天を退去せしをかなしむ。あゝかなしいかな。

二六時中、鏡をのみ友とする諸子の身分は、なになるか、失敬ながら親のすねをかぢりをする身分にはあらずや。さるを身邊の粧飾を毎日の課業とし、ふみよむわざなどをやうなきものにおもひをるは、そもいかなる心なるか、かん身等のおやは、おしろいをかひとて金をおくるや。べにをなむるためにとて金をおくるや。このへんはお

夫妻のあ
らそひは
犬さへも
喰はぬと
いふなら
ずや
驚驚かな
らず痴を
語る勿れ

ん身等の鏡にむかふとき、少しくかへりみたまひ、あなうたて。

(右は橋詰ふみ子の婦女雑誌に寄せられしを抜きて……)

○いもとせ

いもせの中らひ、よからむばかり、よそめにうらやましきものはあ
らじな。よしなきくりごととして、頬ほふくらかし、隣をもはよからぬ
大聲あげて、はてはかたみにつかみあふなど、はしたなき限りなり
かし。おどましき極みなりかし。せはせ、いもはいもの道をまもり
さてつねにうちとけて、もの言はむにもほゝ笑みつゝ、やさしく言
ひもし、言はれもせまほしけれ。あまりに、心やすきは、はた見に
くし。

いとおも
しろきく
りごと、
その情は
深く、幽
艶清綺の
ふしあり

▲きみがかひな

仰げばたかき大ぞらに
のぞめばひろき長江に
あゝ我希望にあこがれて
理想ゑがきしその上の
見よ浮雲の彩あるも
行方ゆくましられぬ影にして
いま世の榮華持ねども
君がかひなに、われは倚よらまし
うかふや雲のはな万た朶
ながれてゆるし水千里
いざよふ雲に行く水に
まよひを今は悟るかな
ながるゝ水の韻あるも
信實まことは何にもとめんや
愛の血汐ちしほの暖たかき

○人、而して男女

記々みな
是なり

他年いか
なる男女
となるべ
きか

故あるに
何ぞ罪と
いふや
ほぢをば
ぢとせざ
るものゝ
多きを奈
何せん

○人は、他の功名を嫉むものなり。嫉みつゝも、一つと稱めるものなり。

○女子を度外視する男兒あり。而も必しも野暮にあらず。

○男子を睥睨する婦人あり。而も必しも高き思想を有せず。

○故なくして、未婚の婦女子と交る人あり。大抵これやがて煩悶の基ぞ。

○故ありて既婚の婦人に近づく人あり、人間の罪、これより大なるはなし。

○婦女子を口説いて、跳ね付けらるゝは、男子たるもゝの最大耻辱と知れ。

○勝手に夫妻を擇びて、父母に其の許可を迫る、もとより孝子の舉にあらず。

○親の選擇したる候補者を容れず、頑として結婚を承諾せぬ者、必しも不孝の子とは言ひ難し。

○老婆の姪なるは、醜の醜なるもの。

○戀する女は穢れたり、未だ男を得ずといふとも。

○水仕女に才物あり。女教員に分らず屋あり。

○世に粹人とかいふ者あり。よく見れば皆、目尻の下つた連中なりけり

○花の如き清淨潔白は、到底人間にあることなし。

頑ならず
んば可なり

見るも嘔
吐せんと
す

アハ、

醜に失し
たり

然り々々
多く得が
たし

如此もの
世間に多
きを恨む

確言
多くは空
想のため
に鏡に向
ふなり

○意中の人を揚ぐるは陋なり。

○失戀の女を娶る勿れ、失戀の男に之く勿れ。

○故障なくして成功したる戀は美しきかな。

○『さようだい』と呼びかけらるゝ語は、聞き心地よきものなり。

○謹慎は偽善の表現なり。

○汝あさましき動物よ、友と競争してまで、汝の戀を遂げんと欲す

る乎

○戀を忍ぶは難からず。戀を退くるが難き也。

○好んで鏡に向ふ人は、情人あること疑ひなし。情人なくば空想あ
るなり。

吾も亦満
足せり

ハイカラ
婦人なれ

早く熱す
るものは
又早く冷
るは自然
の理なり

○『性なるを如何にせむ』と言ふものあらば、そは、克己の徳を抛つ
なり。

○『第二の吾れは即ち子也、吾れの前身は即ち親なり』と、此の語、
吾等を満足せしむ。

○手紙に誤字を書く人あり、婦人において殊に興覺む。

○『我が愛を受けよ』といふは、多くの場合において、我がノラマを
受けよ』と言ふに同じ。

○手紙にて鼻涕かむ人あり、放縱之より甚しきはなし。

○未婚者の涙は甚だ熱し、されども終に冷むるは稀なり。

(田村
夷文)

▲逢瀬川

手毬うた
のひとし
しかも新
休詩の一
体

これにて
本願成就
と申さん

猛十八村でのよい男

引手あまたの十八猛

野良を歩けば茶摘が招く

音に聞ゆた美男の猛

お万十六酒屋の娘

村で自慢の酒屋のお万

お万猛を情夫にはしたが

浮名流した逢瀬川

▲お花

月を招いたとなりのお花

月が戻る様な美しい娘

お花島田何時から結ふた

前の興作か横町の達か

達はよい奴またよい男

家の雛より美しかると

○ハイカラ先生

前の逢瀬川と同評なり、しかも文字も相譲らず、をかしければ比べ見んのみまた稱して先生といふべきか此の如く教授せらるゝ生徒

香水をブンく句はせ、金縁眼鏡をかけた或る博物教師が、薄髭を捻りながら、今し講話の最中である。「花の美麗に咲いて、よい香を放つのは、如何なる理由かと申せば、これは昆虫を誘つて、受精作用の媒介をなさしめん爲である。又鳥が美毛を蒙り、美聲を發するの雛を近付ける爲です。」すると、一生徒が聲高く、「人間が

花の小櫛は誰から貰た

達と花とを夫婦にしたら

何時も庄屋の笑ひごと

は實にか
香水をぬり衣服を飾るのも、以上と同じ理由でせうね先生!」と質
問した、ハイカラ先生赤面して、「そ……そ……それは……ちと」

○小夜嵐

這般の風
情はよく
見ること
なり、而
も聞くを
厭ふとこ
ろなり、
たゞ文詞
は美にし
て治なら
ざるこそ
花の蔭、囁くは何!
戀なればこそ、緑深き橋も逢瀬の夢、
夢に秘めし胸も今宵、万斛の情、迸しる熱は限りもあらぬ……。刹
那!

「千代!!」

うれしき
なれ
「あ、若様、ゆゑに許して!!!」

今朝結ひ上げし、島田の鬘は、落花の上に雲とくづれぬ戀は曲者、
おぼろくの月の影、痛はしや、逃げ行く人!! 微かに、
小夜嵐梢に吹く、無音の二人吾に歸れり。(竹内)

▲春宵窓

柳さくらをこきませて
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
ゑにしの糸の結び目を
さは幸薄すきはな守が
やさしき歌の一ふしに
にしき織成す春のひめ
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
何に解けとの謎かそも
追想にふける肱まくら
心はまたもみだれしを。
「吾」を解けとは罪深し

眞に紅恨
とこそい
ふべけれ

「戀」に別れて漂浪の

「吾」を解けとは罪深し

朧夜の
節いと巧
なりとい
ふべし

結末少し
物足らぬ
思ひせら
る

無邪氣の
口吻、し

など美しくしの姿して

朧夜興はふかゝるに

切めては惚ふ涕を

さわれ迷ひの「春の扉」を

よし秘鍵を執らむ共

愚や!! 狂!! 若き血を吐いて

さらば眠らむ永久に

○子供ごゝる

芳子より

しばしの夢を誘はざる。

往きても見んか花の宮

月に尋ねむの吾か願ひ。

開くに耐へぬ力なり

美しき威は現はれじ。

苦悶をまさん運命とや

淡き燈火を友として。

(川原松聲)

敏夫様、あなたはあんまりだわ、妾が今日、學校へいつしよに行き

かも美妙
のこもれ
るぞをか
し

ませうッて言つても、何とも言はずに、先きへ行つて了ったのたも
の、あなたには妾をきらひ? だつて親類ではありませんか、あんま
りだわ、妾、お父様に言ひますから可いわ。

敏夫より芳子へ

馬鹿にさ
れるかん
にして給
へのあた
り
いよく
妙におぼ
ゆ

僕は芳ちゃんを嫌ふ譯ではないけど、甲太郎君や乙治君などに馬鹿
にされるんだもの、お伯父様に言つたつて可いや、だけど芳ちゃん
學校へは、いつしよに行かなくも、家へ歸つてから遊ぶから、かん
にんし給へな。

あのね芳ちゃん、今、沙汰をしやうと思つて居たのだが、今夜ね、
僕の家でおしるこが出来るから、お伯父様にそう言つて、兄様の武

雄さんと招かれて来たまへな、僕のお母様も、そう言つたのだから
……。

甲太郎より敏夫へ

芳ちゃん
いかな美
人である
か、甲太
郎子よく
御執
心と見へ
る

敏夫君、親類でもものは可いものだね、何がッて仲がよくッてさ、昨
晩芳ちゃんが君の家へよばれて行つたらう、僕には芳ちゃんの様な
親類がないから駄目だ、君は可いねー芳ちゃんのやうな仲がいゝ親
類があつて……
男と女で豆熬り、男と女で豆熬り、やあ堪忍々々。

敏夫より甲太郎へ

甲太郎子
よほど嫉
妬心強し
可笑々々

甲太郎君、芳ちゃんが僕の家へよばれて来たつて、僕が芳ちゃんと

復仇もを
かし

仲が可いたつて、男と女で豆熬りだなんて言はなくも可いや、失敬
な、馬鹿にすると、僕は繪はがきを呉れないから……、ね甲太郎君
馬鹿にしたつて駄目だよ。

甲太郎より芳子へ

お嫁さん
これが甲
太郎の満
腔の妬心
をれ何が
おかし
ものか

芳ちゃん、親類でもものは可いものだね、怎うしてッて仲がよくッて
さ、芳ちゃんは昨晚、敏夫君の家へよばれて行つたらう、芳ちゃん
は可いねー、敏夫君のやうな仲がいゝ親類があつて……、大きくな
つたら、芳ちゃんは敏夫君のお嫁さん？、エ、さうでせう、アハ、
おかしいなあ。

芳子より甲太郎へ

芳さんは
しつかり
して居る
ね
それでも
芳ちゃん
は敏夫様
のお嫁に
なる心が
動いたの
であらう
さすれば
甲ちゃん
は自然の
月下氷翁
ならずや

甲ちゃん、あなたは何かをかしいの、親類同志で仲のいゝのが何が
悪くつて！、あなたは意地悪るね。

敏子より敏夫へ

敏夫様、妾口惜しくつて、昨日ね、あの甲ちゃんから親類でものは
仲がよくつて可いの、大きくなつたら敏夫様のお嫁さんになるんだ
らうのつて、妾に言つてよこしたの、だから妾、あなた意地悪るね
ッて言つてやッたの、ねー敏夫様、妾、口惜しくつて、口惜しくつ
て……。

敏夫より芳子へ

芳ちゃん、甲太郎君は、僕へも意地悪の手紙をよこしたの……、僕

天真爛漫

は何と言はれたつてかまはない、意氣地なしッて言はれても、何と
言はれても、大きくなつてから豪い兵隊さんになつて、威張つてや
るから可いや、ね芳ちゃん！失敬……。(中村禪)

▲静夜思

星かげきよく黄金なす

夜半のみ空の露の香に

にはふ花野の夢とへば

小川のことの音たかし。

あめつちねむる揺籠の

つかれやすむる枕にも

なほ響くなる讚美歌に

造化のゆめの安さかな。

思へば人もいにしへは

神の愛子まなこといだかれて

聖きよき自然のむねの上に

とはの喜び享けにしを。

半夜ゆめ
のさめし
時、枕を

欺て、過
去將來を
回憶する
ときは、
その無量
なる憾慚
は常にこ
の詩の如
くに起る
ものぞか
し

あゝ罪咎の世にいで、
ほしの韻もはなの美も
たふとき歌も利の爲に
くるふ浮世をいま更に
いま莊嚴の夜のいろに
浮世の運命さとれとや

まことの幸の絶てより
涙なるこそかなしけれ。
優しきこひも愁ゆゑに
概き侘るにあらねども。
過ぎし我世を偲ふれば
はしも涙にうつるなり。

(雪溪樵夫)

○清 怨

彼方かなた此方こなた、墨汁いんきに汚染よごれた文机ぶんぐゑの上、暗淡孤檠こけいの光線こうせんを浴あびて、多
想おぼい土産みやげ入いれの信玄袋しんげんぶくろは正整ちやんと置かれてある、如何どうでも若もしや、失念

この信玄
袋の中よ
り何を出
すならん
こゝ傀儡
子

でも有りはせまい乎と、妾は再度袋中を、檢閲て見た。——芳香が
馥郁ふくよく鼻を突つく、百合花の挿頭かざし！現品は可愛の小妹にと、各種々七本
迄も包んだ、東京は眞便利な土地、低價で高尚な腕止うでどめがあつたなら
ば、這般こんどの夏期休どうどに何卒一組、持参もちまゐつては呉れまいかと、!!
義兄の賞揚の手紙が、妾は妙に満足で、匆々買入れた、此腕止——
高價なものとしては、以上二品しか無いが雖然、吾人は現今、光明あ
る彼岸の成功を希望で、白雲幾十里の客舎に、苦學しつゝある可哀
一個の女學生では無い耶？如是を、——虚飾に、苦しい學資の半金
を投割なて、大々的土産を贈與おくりつたとして、夫れが何功にならう……と
斯こう、妾は故意わざと御兩堂へは、名物の甘諸を入れた、彼是少時と一

その情熱
のかくも
あるもの
を、知る
人の無き

はいかに
うらみを
れ

覽了つて、各自元所に收納やうとすると、忘れて居たが、然而現品
も！天涯故園を後にして、目下は信濃の寒山村に、移住て居る、芳
江君なる親友の襟に裝飾と、殊更買ひ添へた小形な裝飾、！田舎と
は雖、想ひは誰女も有同無異、少時も早く都門の珍品に芳江君が誇
的の美顔を見よう、而上君が我が手を携へて、五城樓下の山河に、
望郷の感想を相語らうと、……然矣、自分は明日一決信濃に芳江君
を訪ふて、翌明日は君と諸共、流れ變らぬ廣瀬の河畔、五城樓下の
客となるのである、

こゝ一節
を節した
ばかりに

噫、重疊の山河を超えて、長送、もたらした東都の珍品も、斯うし

その順路
の五里霧
中なるも
後にて知
ることを
得らるべ
し
この詞は
美文とし
ての一体
とも思は
ゆるため
こゝに掲
げしまで
ぞ、範る
べきには

て妾は、誰人の胸襟に裝飾とはするぞ!!、半年音信の絶無たのも、
起思ば此故であつたのだ、眞乎、芳江君は、其美しい單純胸底から
青春神聖な戀愛は湧出で、有例!?人生を悲観だが、純朴い、同村
の若者と、月夜の千曲江に相抱て身を深淵に沈ませた、——遮莫友
よ、其の江頭に俯仰て、天空なる月を仰視た瞬間！東、六十里、同
運命な吾人を偲ばなかつたが、否々、我友はその刹那、悉皆浮世の
煩悶を解脱れて、泪の中に笑み交はして、如此て、美的永眠に就い
たつであらう其様を、都會の浮戀などに、比べたならば果然、幾何
の差別があらう、男性一人を信賴として、實在の身靈を捧盡くした
芳江君の熱戀……

あちぬも
のを

多感の妾は、もう堪へられぬ、終生……多恨い月夜の曲水をば忘れぬ、胡爲乎忘劫られやうぞ。

信濃は我友の青山である。(安孫子美)

▲星の光

西の國なるたびとか

雪より清きこゝろもて

みそらの花と歌ひたる

星にたねせぬ光りあり」

風の前なるしらつゆの

つらぬき留ぬ玉の緒に

しばし影をやどす時

星にはもろき光りあり」

戀に煩わしうたびとが

靜かに眠るかくつきの

銀杏の梢にきらめける

星には奇しき光りあり」

四つの星の光り、取りわけ三つと四つとのふしおもしろくをか

散りたる花を抱きつゝ

とはにねむれる蝶々の

小さきむぐろを照す時

星になんだの光りあり」

○産靈神の使命

散らさる可き嵐吹かば、潔よく散り果てむこそ、實に武士の心ばへなれ。花、櫻。

この神は春の女神にはおはさずや

深山の奥の谷間を流るゝ清水に、陽炎の影を映して、戀のはのめき知りそめし稚兒櫻。うら若や悶々の闇に迷ひ惑ひて、端なくも爾か聖き胸のあたりを穢すなよ、心淋しうは有らざれ。よき友を得しめむ。なれにふさはしき配を得させむ。

この董が何故に異國の少女

春日の丘に求めむか、懐かしき優しき姿の董はあれど、彼は異つ國

とて横せ
らるゝに
や

花神も首
肯すべけ
む

人生五十
年といへ
ど、思へ
ばあすを
も知らぬ
身の上な

の少女にあらずや。ゆりも、薔薇も、おゝかの乙女椿か。餘りに鄙
びたらずや、さらば秋野に探らむか。禮やかなる菊姫もあらむ。さ
れど吾は産靈神の使命を帯びて、汝に相應しき妻娶らせむかな。
萎る可き涙の雨に、思ひを寄せて降られなば、何、花の色香を惜ま
むや。しほらしき大和撫子の花。(静子)

▲胡蝶によせて

かげろふ燃ゆる春野の

裳裾褰げてゆくさらさ

夢まどかなる花かげの

酔ふては暫し人の世の

堇のそこをなづかしみ

暮るも知らぬ里の子よ。

蝶をな追ひそ甘き香に

辛きさだめも消べきに。

り、花に
眠れる胡
蝶の夢こ
ますなど
は、さて
もやさし

可愛げな
る幼児の
さま、市
松人形を

風も音なきはるの夜の

床しと見しは束の間の

散りてはかなき花弁を

げに色見わた移らふは

朧の花をすかし見よ

そはまぼろしか晨の雨。

たれか昨日の色と見ん

世の人みなのことろ哉。

胡蝶よはなの下かげに

光りはいかに薄くとも

しばしは眠れ春の目の

露を衾の枕にはして。

○幼 兒

咲き亂れた櫻の木蔭、搖籠に可愛い幼児がすやくと……うら
かな春日は、弱い暖い光を顔に與へて、淡い陽炎が……雪の
様な白フランチルに包まれて、配合の好いとき色レースの涎掛、其

こゝに弄ぶがやうに

犬の形容などなかくにをかし

自然々々美文の妙は這般にあるべし

優美なる趣きありて、よく題意に適したり

の中に眠る静かな顔、女だらうか、否、どこやらに見ゆる凛としたけはひ、やはり男の児だらう、福やかな羽二重の頬は、林檎の様に閉ぢた眼、小羊の和かいまなざしを包んで居るのだらう。雪中の紅梅に似た口からもれる寢息しづかに、今にも笑ひ出さんけはひ。根元に眠つて居た美しい洋犬、足音に耳引き立て、我れを熟視することしばし、やがて安心した様に、幼い主人の寝顔を見やつて、再び耳をたれ、目を閉ぢた、顔を前足にのせた、ねむつてゐるのだらうか。

かな笑がほのかに……小鳥の折々囀る聲に、洋犬は物憂さう、微かに眼を開いて、耳をそば立てた。あゝ、静かな晝のどかな春風が櫻の枝をゆつたので、花びらが無心の寝顔に二つ三つ。小さな拳が、僅かに動いた。つゞいて、身を一ゆすり、手のおもちや、すべつてガラ／＼、蝶は飛んでしまつた。洋犬は立ち上つた、無心の寝顔は尙平かに、まるで聖き美しい神の宿つて居られる様に。(三浦久子)

○人間

人間とは何ぞ、これを女にしては、世の人曰く、面には磨砂つやうの真白きもの厚くぬり、唇をば燕のやうになし、雨ふりても漏らぬ

男女のハ
イカラ容
姿を寫し
出すこと
最も適實
なるを覺
ふ

空洞即ち
○なれば
まだしも
なれど、
猶これよ
りは甚し
きものあ

り、諸君
それこれ
を知るか

末段の敷
節ありて
この文板
ならず

用意の庇髮ひしがみに、ホワイト、オリブのリボン、こちたき草花結びま
ろめし簪、かすかす飾り立て、身には父母の御汗にかへし縮緬羽二
重をつけ、濃紫の袴に佛蘭西形の靴うがちし姫君、即ち人間なりと
これを男にしては、世人曰く、頭はチツクとやらんにて、犬のなめ
たるが如く分け、金縁きんごちの眼鏡めがね仰々ぎやうぎやうしう人を睥睨へいげいし、髯ひげいたくひねり
上げて、衣はパリの流行を追ひ、新荷着の廣告を見ることに、人に
魁せいかいせられなば、己れ一代の不面目とや、戦々競々せんけんきやうきやうきとして、或は靴に
或は帽に、その心をなやます、すれちがへば、香水の香鼻をつんざ
く。かゝる紳士即ち人間なりと。而して、彼れ等が心や如何。其れ
紳士、姫君、日夜かゝる外面の飾にのみ力つとめて、其の内心や、實に

空洞の如けん、物に譬ふれば、則ち赤きゴムダマか。美しき皮をは
げば、あはれ空洞よ、あゝ心空洞、タマ空洞。空洞は即ち○なり。
あはれ、心なきものにて、人間と稱し得べくは、己れはゴム人形に
美装せしめて、之れ人間なりと云はむ、彼れ等にくらぶれば、之れ
は米はまぬ利益あり。
心なくして、人間と稱し得べくば、己れは、向ひの猫も玉子嬢、隣
りの犬も太郎君とこそ呼ばめ。
あなあはれ、今の世の所謂人間とは、それ人形猫犬と遠からざる者
か。

▲春野吟

春の詩は
まことに
斯くこそ
あるべし

春野自然
の景は、
詩句の中
にうつく
し

まだうら若きはる姫の

吹きそよぐらん春の風

堇たんばゝわか小ぐさ

彩の繪筆のあとのごと

詩歌にうみてつと立て

吹き來る風の緩うして

空は優しきあさみどり

聲はどこまで響くらん

あゝ霞濃きあさばらけ

蝶ひらくくと下るとき

宮の帳をそともれて

優しう眉にしむばかり。

たとへば若く繪巧みの

美はしくも咲けるかな。

そよるさまよふ春野や

美はしき夢むすびよき。

春の譜もらす黄栗留の

小さけれども花やかに。

堇の花はちさくして

其處に詩人や生るらん。

○美しくしきもの

ふりこかきたる稚兒の顔はさらなり、三つ四つばかりの男の子の、
軍服つけてかたことながら、桃太郎の唱歌をうたふさま。

八つばかりの女の子の、筒袖服に紫の袴、裾短かくて、みどりのか
み、長く垂れ、あかきリボンもてつとひきむすびなるうしろすがた
いとらうたしや。

にくからぬ乙女のかみを、むぞうさにまきたるに、薄紅のばらの花
かざしたる乙女のかんばせ、さながら、いとどうつくしう。
あるはひなにめづらしき品ある女の、赤きたすきして、脛もあらは
に早苗とるさま、此上なううつくし。

このあた
り、いと
無邪氣に
てよし

美しくし
いはんよ
りは、可
愛といば
ん方いか
に

花よめの三字、いかにも美しい、う、を、か、し、う、思、は、る、

ほたるをもて女王と名づけゝることいかなるべき

まだうら若きいくさ人の、金モールの服つけたる、いかめしうもいと美しう、年老いたまへる人の、ましろきひげ房々したる、花よめのすがた、おもふ人のゆかしき筆のあと、花にては、りんごの花、みすれ、女郎花、櫻、山吹、かぞへゆかば、美はしきものなほいと多し。

○螢

三日月淡く、里川堤の柳にかゝる時しも、愛らしき浮草うきくさの上に、少なき夜の女王は生れ給ひぬ。
聞け、静かにさゝやき給ふを、『我はもと彼の星の同胞はらからにして、よひく毎に紫のかどやく衣をつけては、運命をかこつ、弱よわき子あたに温

星といはで夜の女王といふはよし、ほたるを星といはで、直に女王といふあたりは、物足らぬやうに思はる、いかにや

かき慰藉を興へ、希望にみてる若き子に、新らしき勇氣を興へ來りしが、今や暑さになやむ人の子を慰むべく、母なる神の仰せをうけて、こゝに來りつ。
愛らしき音のうちわの下に、はかなき死を遂ぐるも、ゆかしき乙女の文讀む窓をてらして、歌の道にのぼらんも、星川深く、恐ろしき水底に沈みて、あはれ藻屑もくろとはつるとも、そは我が知らぶ所にあらず、母は温きみ手もて我を守り給はん。
たゞ身を、うき舟の風に任せん』たゞまたるゝものは、この夏の務め終へて、み空に歸らんその日よ、あれ見よや、愛らしくも亦尊たからずや、柳の糸のもつるゝ堤つゝみのあたり、かるらかに、夜の女王の舞

言葉はや
さしくて
いと妙な
り

ひの手ひるがへしたまふ姿は、自然のなせる、神殿の奥深く、母な
る神は効なき子等の務をつくすを嬉しとはへしみまさん。
空の星はまたゝきて『やがて歸れよわがはらから』とさゝやきぬ。

○破濤兄に寄す

天下幾人
この種の
人たらざ
る、これ
を戒めよ

二月二十八日附の書面、余は一度読み、再び読み、三度読みて泣き
ぬ、あゝ是何が故ぞ、嬉しくてか？慕はしくてか？あらず、あらず
余は君が郷里の病褥にある愛妻を思へるの情、切なるに感じてなり
不幸にして其慈父に逝かれ、其兄に離れ、其最愛なる良人と遠く離
る、然して身今病褥に惱める君の愛しき人を想うてなり。
あゝ愛深き君よ、君は自ら妻の可憐を知り、然してなほ異境の花に

眞に今世
細君のモ
テルい

酔はむとはなすか？そは餘りに罪ならずや？不如歸の浪子を思はざ
るか？君は云はむ事情止むを得ずと、善矣。たゞ希望に向つて馳せ
!!氣丈なる君の愛しき人は、君の榮達を百千の醫藥にも増せりと、
來るべき樂をば指折り待ちつ、保養怠り玉はざるなり、乞ふ自愛せ
よさらば。

○葉の董

繙くところの詩集
は、果して如何なるものぞ

私が姫君の詩集に挟まれてから、早や三年になります、最初の一年
は私も若かつたし、姫君もそれはく輝く許り美はしう、詩集を開
けて、いつもの句を小聲で繰り返さるゝ時、さも嬉しさう、幾たび
もく私にキッスして……二年目には私も瘦せましたが、姫君の御

屋鳥の愛
其人を思ふ

やつれ様は驚くほどで、例の句を読み、私を御覽なされる都度、千筋の涙は瀧と流れて……あゝ三年目、三年目には、とうとう私は塵を戴いたまふ、暗い手函の内へ葬られました、枯れ萎む、我身は露厭はねど、只心がよりは姫の御身！
(宮地 猛男)

▲四季の風 (英詩和譯)

高きに吹きつ 低きにも

春の東風 吹き渡る

吹きて童のつくりたる 紙鳶飛してぞ戯むれつ

青き大空とほくまで 吹きて紙鳶をば飛す也。

又もや愛のをとめ子の 頭巾をかすめ舞ひ上り

にくや春風、うれしや春風

あら風に
残花を吹
き散らさ
る、たゞ
鳥蜂のう
れひのみ
ならず

紅葉のま
ひ飛ぶも

長く垂れたる黄金がみ ぶり亂してぞ纏はらす。

高きに吹きつ 低きにも

夏の暴風 吹き渡る

吹きて園生のむら千花 吹きつ吹かれつ散含む

絶なき野原みどりぐさ 黄なる穀物たはむなる。

又もや木枝の鳥の巢に 住ふ鳥をばうごかして

降り来る雨は猛らけく 硝子の窓に洒みて洒む。

高きに吹きつ 低きにも

秋の木枯 吹き渡る

吹きて無常の蜂やはな 秋ぞ殊にとおどろかし

またこの
風、こゝ
樂しくて
にくから
ず

われ冬の
風を愛す
人の面の
かほるこ
と、思ふ
さまのい
ろく／＼な
れど

前半の叙
景、少し
く長きに
失したり
とおぼゆ
る嫌ひは
あれど、
寂寥なる
夕ぐれ、
身にしむ
唱歌の聲
と、いと
かあはれ
を催せり

ひがしも西も野も山も

又もや多き木枝をば

近き此方にこがねなる

高きに吹きつ

冬の北風

吹きてぞ雪はひらく／＼と

ふかき谷底やまのくま

又もや吹きて効な子を

大晦日をばよぢこゑて

立田の姫や舞ひさがる。

禿まで吹きに揺に揺り

胡桃や林檎まきちらす。

低きにも

吹き渡る

木の葉にかはり満々て

美しげにと壓しなゆる。

學び路笑みて送りてぞ

君が御代こそ歌はしむ。

○唱歌の聲

太陽は今沈まうとして、名残を惜んで、山と云はず、空と云はず、
森と云はず、轉つて居る草鞋の切れまで、黄金色、否寧ろ紅色に染
めて居たが、日が沈むにしたかつて、山々は紫色となり、紫色は藍
色となつた。これが所謂暮色蒼然たるものであらう。
折りから、遠山寺で撞き出す入相の鐘。日の光りを追ふて、寂寞抱
く夕暮をふるはして、餘韻長く／＼、二聲、三聲……、第六聲は遂
に茜薄れゆく犬空に、一つの夕星を生みだした。
處々の森や、川の向岸の山際の百姓家から、夕餉の烟の、うすく濃
く立ち迷つて、遂には靄と化してしまふ、あゝ、其の豊けく立ち上
る煙のものを尋ねたらば、洋々たる和氣は、軒傾きし賤が藁屋にも

祖父なる
人、いか
に可憐の
涙を垂る
くらむ、
實況見る
が如し

である。御隣の御祖父様とこへ来て居るので、こゝから毎日村の小
学校に通つて居る。

あのやさしい可愛らしい顔容と心にも、哀しい歴史は持つて居る。
「今や我等を待ちまさむ」無意識に歌ふのでありしが、邦雄は待た
るゝ父母を持たぬのである。其聲を聞く時、御祖父様の耳に何と響
くであらうか。

外の自分でさへ涙が自然と落ちるのに……もう自分は先を聞くに
堪ぬ。あゝまた聞ぬる。

「稻葉そよぎの秋の風……」。

▲煩 悶

心の胸を
繋ぎ止む
べき綱は
なきにや

尼となる
べし、第
一の救神

星よみすれと叫びつゝ

夜ごと日毎に悶へつる

妾は未だまなび舎に

希望の玉をみがくとき

さ思ひながら情慾の

たゞよはさるゝ一葉舟

救ひの神よとく來ませ

董るまざる野邊にゆけ

○愁 思

埒なき戀にあてがれて

嗚呼愚しきわが身かな。

教へのまゝをいそしみて

そらあてがるゝ折ならず。

迫る胸ささかさゆれど

いよゝ危きわりなさよ。

悶ゆる吾が手を取りて

星なき里にみちびけよ。

今宵いとつれぐゝにて、文讀まんも覺束なければ、書など片づけ、

女子の一
念岩をも
通すとい
ふにあら
ずや、す
でにこの
初志あり
この覺悟
あり、し
かもこの
愁ひを見
んとは、
ハテサテ

獨り机に倚りてあれば、昔に歸る思はいや長く、はては今の身の果
敢なさに、あふるゝ泉のそれならで、末は流れ涙川、こよなき舟を
うかべつゝ、いと哀れはふかゝりける。

あはれ、想ひ出づれば三歳の昔、功名心てふもの縷々として妾が胸
を衝くや、烈風の猛火を煽ひで枯草を焼くが如く、思ひつめては女
子の一天張、矢も楯もあらばこそ、遂にそが年の空高く馬肥ゆる頃
垂乳根の許しをうけて、大和のさる學び舎にいりつ。

よしや拔群ならずとも、六寸の筆四寸の硯、螢も集むべく、雪も積
むべく、露れて後止むの覺悟をもて、四年の後はおはれ教育場裡、
美花を咲かさんと思ひしを、荒浪たけき世の海、迷路多きうき世、

別に深き
仔細のあ
るらめ、
蓋し己れ
より出る
ものは己
れに復る
といふに
あらずや
いかに

いつしか妾が心の駒は、煩悶の深田に落ちいりて、打てどもく進
みぬす、爲に平生の主義は碎け、理想は破れ、胸は憂愁に苦しめら
れ、身け懊惱に刻まれて、ありとあらゆる悲惨悉く一身に集りぬ。
雲なす櫻花満山を閉ぢこめて、春風徐にはつ枝よりしづ枝を吹き、
人は花に酔ひ蝶に狂ふの春は、あはれ妾が懷舊の情にゑたへで、悲
嘆の淵に沈めるとき、幸福なる學び舎の親しき限り打つとひ、夕顔
棚下に涼を納れて、罪なき話に月を待つ夏は、これが弱き妾の胸
を千々にさきつ、秋はまた哀を添ふる虫のね、諸行無常にひどき渡
る鐘の音、はたはろくとなく鳥の聲に、人並ならぬ妾が身のいと
果敢なきに、玉の緒絶へなば絶へよと計かり悶へに悶泣き、舌を

舌かみ切
らんどま
でおもふ
とは、如
何よる事
情の纏れ
たるもの
ぞ、彼の
ハイカラ
式の厭世
志想を求
めしにあ
らざらぬ

噛み切らんとせしこと幾ばくぞ、冬となれば窓打つ時雨の音も心を
痛め、吹きすすさふ木枯の響にも塵の世の無情をかこちつゝ、鬱にこ
められ、憂うきに閉ぢられて茲に幾星霜、人生既往きわうを思へば、恍として
夢の如しと、吁あゝ、浮世はかくまで果敢はかなきものなるか。
時には四苦心を惱まし、血を吐くの想ひあり、又は八苦身をまどひ
て忍ぶ涙もありし、三千世界廣しと雖、此歎きわかたん友はあらじ
あゝ千愴万恨源涸れぬ無盡藏、悠々たる前途果して如何にせん、其
後妾眠りしも、妾が眠りはまことならず、妾笑みしも、妾の笑みは
真ならず、只涙のみぞ真なり、されど涙も今は乾きぬ、泣いて同情
の友を得ざればなり。

何をか不
平といふ
世の悪し
きにあら
で、汝の
あしきを
先づ罵ら
ばいか

汚けがされたる憂世うきよ、迷暗なる社稷と罵りつゝ、ある社會そのものゝ爲
に苦しめられ、不平满腔に満ち、悲愁こもど交々至りて、心穩やかなる稀
なるは、これ妾の胸裡、鬱苦の境を徜徉し、胸中常に憂雲愁霧に掩
はれて、厭世えんせいの情緒感慨に觸れ、過去の歴史を追想しては悶へ、未
來の如何を豫想しては、且夕涙に袖を絞しぼりて、宿生の因縁を怨みつ
ゝあるは、これ妾の心中、あゝ妾は何たる薄命ぞや不運ぞや、若し
それ影くらき孤燈一穗すゑの下、瞑目之を思へば、寒慄かんりつ日回、あゝ止み
なん／＼世にすてられし我、さるほどに窓押し開けば、山寺の鐘の
音いつしか八日月を撞きおとして、森のあなたになく犬の遠吠いと
ものすごく、あはれはいとどまさりけり。

(増田
花子)

いと氣高
きふしあ
り、新麗
よろこぶ
べきもの
ぞ

▲野 梅

明けの明星ながれ行く
森よりひびく寺のかね
ゆめ見る里へ渡りゆき
平和のかみの呷やきの
神秘の幕を洩るゝとき
露にあけゆく我野邊の
梅のはゝ笑み清きかな。
霞に消ゆし牧童の
行方しのびてさ迷へば
朝月あはしもりのうへ
雪をかざしゝ紅梅は
いさゝ小川に美しくしき
墨畫に似たる影を投げ
水は暗香うかべつゝ
高きすかたを湛たてぞ
かすかにひびく牧笛の
低さしらべと相和して

よく題意
に適せる
を覺ふ

清婉、後
節ことに
佳なり

女あり窓
に凭るの
景、描し

○玉 章

甘きなさけの歌となり
末はみ空にかよふらし。
あゝたふとしの白梅よ
清き詩の精やどれるか
あしたの風の渡るとき
涙にぬれし鬢の毛に
散りこぼれ来て大神の
使命をそれと傳ふるか。
蓋しほの香に酔ふ此あした
けがれの我よいま何地
我は今こそさちの子よ
胸の小琴はひくゝとも
情の歌は汝れに得つ。
(天野清子)

秋風身にしみそむる此頃、みるめもかれし浦住の身さへ、さすがに
まうけの衣とも取りいでゝ、終日淋しき旅窓にこもり暮すめれど、

ていと妙

たどくしき針の運びの覺束なしや。

かく玉章の返りどとさへなきは、もしやそれかと

送り参らせし文は、いぬる十日の、數ふれば、はや片手のおよびの數にもあまりぬる今日まで、萩の上風そよとだに、音信も無き人の心の、さは冷やかなるよ、書き交す雁の玉章、例にもあらばこそ、葛の裏葉の、かへすくもと望みきこひ参らせつる、その御返しあらぬ三日を猶さりともと、まちわたりし昨日けふの心まどはしさ朝のまとの、茶柱に、何うれしさを頼みけむ、夕戸出の、蜘蛛のふるまひ、誰かは人の尋ねおこせし。縫ひさしの針は、きしくとしめりて通らぬぞ、にくき。つとひきたぐれば、うたて糸はきれたり、ふと見やる、そうじに染めいでし

ゝことのあるらん趣いとふかし

夕日の殘暈。やうく色あせて、前栽の萩、一しきり風渡るよと見るくほろりとこぼるゝ花の白くほのかに、あはれ、斯くて今日もむなしくくれんとすらむ。

▲若きおもひ

妹が眠りにつきし真夜中に

ひとりおきゐて書きし此ふみ

嬉しくもまたかなしくも成にけり

君が一言もとき得ずして

其折々いさめたまひし言の葉を

思ひかへしてまた筆をとる

妙齡女子の心根ありくど書きつらなたり、しつみみだらなるをいかにせん

すでに母
の言葉
實にお
もは、
仇しそ
人に戀
絶つべ
に、さ
は勇な
ことよ

山里の琴の師訪ふとうねり行く

菜ばた麥ばた風しづかなり

師のみ影踏みまつらじと道すがら

心して行かれたそがれの月

かにかくに人に云ふらむ譏るらむ

音づれせぬぞなさけ也ける

神かけて誓ひし戀をいかにせむ

母のみ言葉實にと思へど

○花

天上に花あり、長しなへにうるはしく匂ふ、人の子これを星の花と

花のみた
ていとお
もしろし

このあた
り、よく
美文の妙
を得たる
もの
そのさ
げしは誰
がもとに
ある

あをぐ、下界にまた花さく、草の花、木の花、波の花、これみな神
の大なるみ手に刻まれしものとかや、春は花によりてかざられ、人
は花をみてたのしむ、なべて、花にやさしき色あり、すてがたき香
あり、例はど、わが女子もそれに似るぞかし。

……一二輪さきそめし風情のいはむかたなきに、一枝花折りて御目
にかけまわらせ候まゝ、御文机の片隅にだにさしかかれなば、うれ
しかるべく、こよなき花の面目のみかほと、白梅にそへて送りこし
親しき友垣の、水ぐきのあとの匂ひこばれんばかりなり。

さても、神さびたるうぶすなの大前に、神代ながらの古き一本、薫
じそめたるけしきの、いかに尊かるや。

これも亦
わが心を
得たりと
やいはま
し

あゝ失戀
の子よ、
いかにも
のうにお
もふなら
まし

花てふ花王のは櫻花かも、うすくれなるの色さへ香さへ、佐保姫の
かざしと見ゆらむ、『古の奈良の都の八重さくらけふ九重に匂ひぬ
るかな』と口ずさみて、時のみかどが一しはの御感にいりにし赤染
衛門が歌の姿、おのづからその昔を偲ばしむるなる。

三つばかりなる稚き妹を抱きて、川添野道のそとろあるきを、強
て乞はるゝまゝに、折節さけるうばらの一輪を折りあたへけるに、
しばし、そがあたゝかき口づけにたゆたひしも、そと流れに浮べて
はゝむ罪こそいかに清かりしか。

運命の神の手にもてあそばれけん、失戀の子が、夕べ戸によりて、
うとくとふる春雨のはそく山吹にそゝげば、ばらくとさびしげ

たゞ西國
の詩人の
みならず
るなり

見るが如
し、描く
がどし

にこぼるゝを、うるめる眼にながめやりて、たへざりけむ、力なく
首うなだれたる悲しさは、戀のゆく末ならずや。

西の國の詩人が、いみじき才情もてたゝねたりけむ、堇のむらさき
にこそゆかしけれ、春の歌誦しつゝ、わか草もゆる野や、せゝらぎ
ゆるき小川の岸のべに、小草の花をつみにき、かにみにかかしう遊
びたる、君よ、今いづこにや、おしむらくはうつろひやすき色にし
て、そとろ惆悵の思ひにいたましむ。(小池秋子抜節)

○堇

胡蝶すみれのいろ慕ひ

風は胡蝶のすがた戀ひ

へつらひくるひおもねるよ。

をふよすがるよ纏はるよ。

何ゆゑに
もくして
餅らざる
にや

形容し得
ていと妙
なり

驚も詩人
に入る蓋
し本望と
いひはむ

この情緒
あり、兄
妹相愛の

知らず、董はたがために
夕照る星やなくとりや
何れを愛る花すみれ
夜毎しづかにしら露は

笑むか粧ふかつくらふか
さては朝のしのよめや
ふかくもくして語らねど
花のうてなに宿るなり

▲月と鶯

水はのしろきゆふ暗の
眞珠とかせるやま川に
地のうたびと鶯は
うたひくらしてねむりけり

谷に月ひめあもりまで
にじのみたれ毛洗へども
藤のとばりの影ふかく

あしたのかをり鶯の
妙なるうたはしろ金の
天のたをやめつき姫は
てらしあかしてかくれけり

縁のそねにふき初めて
流れに谷の溢ふるれど
曙のみすれの雲ふかく

○思ひ出

おどろが下に、何をかこちてか、鳴く虫の、今宵はわきて物怨しう
そとろ都にゐます兄君の忍ばれて、懐かしさに堪へず、何となう胸
おぼめくに、讀さしの書なげすて、やをら立出で、窓の戸をせば
折りしも十五夜の月皎々としてみ空に高く、さつと吹きくる風に、
草葉の露はろくくとこぼれぬ。

至情は言
の葉にあ
ふれたり

兄弟人も
その心し
て居ます
らん

いつもこ
の心さへ

失はねば
兄弟ども
に籠るべ
きの人と
ならまし

この題の
こときは
頗る詠み
にくきを

あゝ、思へば、三とせの昔、戀しき兄君と手をとりにて、そよふく風
に四つのもを拂はせ小川の邊りを彷徨ひつゝ、樂しくあてがれし
も、今宵の如き月の夜なりき。兄君が笛、妾が琴に、南そうの下に
好める曲の數々合奏せしも、今宵の如く虫の音しげき宵なりき。あ
ゝ、懐かしの兄君よ、樂しかりしも一眠の夢。今は遠く幾百里の西
と東に隔てられつ。又相見ん時の、果して幾年の後ならん。さても
慕はしき兄君よ。今宵を如何に眺め給ふらむ。孤燈の下、文枕にも
たれ、妾が編みて參らせしひぢ付してひとり詩想にふけり給ふか。
はたまた、感情ふかき兄君の、此の月に對し、同じ思ひに、樂しか
りしそのかみ、忍びてもおはすらんか。花に月に、片時忘れずと、

のたまひし妾が上、こよひも思し出で給ひてか、あゝ、懐かしの兄
君よ、翼あらば飛びても參らんものを。思ひ得たへで、目を閉せば
鬢としてあらはる、そがおもかげ。あな、慕はしの兄君よ。ふと
仰いで、空をのぞめば、月いよく冴えて、夜はますます更けぬ。
折しも、友にや後れけん、はらからにやはなれけん、かすかに聞ゆ
る孤雁の聲、いとも哀れに身にしみつゝ。

▲銀河の賦

よひをきらめく夕づゝの

今たそがるゝおは空に

夕べのそらを七いろの

光りほのかにうすれては

高くかゝれるあまの川。

彩うつくしきにじのはし

かく長々
ど、しか
もこゝろ
をかしく
詠みたる
ことのう
れし

新趣をよ
み出した
る、いよ
よ巧みな
りといひ
つべし

猶このさ
まの残れ
るもゆか
し
乞巧奠の
いとなみ
面白くも
また愛で
たし

その束の間の榮ならで

無始の極より吹落ちて

かの天風はおほざらに

流れてとはき三千里

亂さむにして餘りには

されど思ひの羽かるう

かの大江の岸にして

そは永久の世の韻して

千草の花の咲くところ

思へば今よひたなばたの

これや終夜のおどり見よ。

無終の極にふきわたる

如く無き権力持つとも。

夜ごとしづけき川波を

よわきそれよと仰ぐ哉。

雪の浪路をはせゆきつ

千古の波の音をきかめ。

人の子、胸も堪ざらむ

額、白砂にして泣ましを。

星も一夜のあふ瀬とや

空はれ渡る夜をこめて

耳をすませば里の子が

歌かいつけし短冊の

紅、黄、紫とりくくに

七夕まつるをとめ子が

吹くは秋風しかすかに

松ふきおつるひとしきり

欄干朽ちし古塔の

いよ、河けき銀河

河波こゆるうきはしよ。

織女ばしよ、牽牛星と

小笹うちふり唄ふなり。

七色のいと染めかけて

祈るは小さき地の戀か。

昨日は似ぬさびしさや

衣の袖もひるがへれ。

扉に倚りて眺むれば

今かわたらむ鶴の橋。

(多田生三)

一篇の説
の体をな
す
小品文の
上乘なる
もの
人を以て
禽に如か
ざるべし
んや

姉の戀は
冷むるこ
となく、

妹の戀は
終に温か
ならず

この姉こ
そ、わが
理想の戀
を運ぶに
足らん

ハイカラ
先生の戀
にいづれ
ぞ

○雲雀

ひはり
雲雀は小鳥に過ぎず、而も雨ふるも、強大の翼動かしつゝ、空を上へ上へ、昇り且轉りて止まず、急轉直下するにもなほ轉る。又群をせず、麥畑にのみ生活し、樹枝家根に上りて轉ること、更になし。人もかく主義あり、特長あり、獨立獨歩、規律正しく活動し、向上致したきものなり。
さてさて、小鳥に教へらるゝとは、耻しき哉。(崑山昌)

○姉妹の戀

姉は十八、妹は十五、同じ星の下に生れ、同じ慈母に育てられながら、姉はの炭如く、妹は花の如し、而して姉は伏して嘆息しぬ、燃

火の消え行く如くに、又妹は仰いて微笑しぬ、花の開く如くに、あゝそも何をか嘆く、あゝそも何をか悦ぶ。(青柳優雅)

▲戀

春の胡蝶ははなよりぞ

夢みる宿はなかるらむ

花は胡蝶のキスよりぞ

外に望みもなかるらむ。

春の女神のふところに

花に胡蝶のなかりせば

もゆる詩人が胸にだに

こもる涙はあふれざれ。

一つの花にてふ一羽

花のこゝろの甘ければ

小さきくちばし押當て

何を夢みてねむるらむ。

露はまくらに光りつゝ

春よ眠りよいましはし

牛背の牧
童笛を吹
くなどの
圖は、こ
のさまの
うつされ
しにやら
ん
秣まにかり
こめし草
の中に虫

花のさだめを云ふ勿れ

▲牧の子よ

草暖かきはるの野の

生活たつきか永きはるの日を

人の世遠きそのおもひ

鎌とる暇もなぞもなく

句ひはふかき花の精

やがては萎む冬の日の

さにはあらず蜜蜂の

濺そぐか雨のはそめきに

胡蝶のゑひを云ふ勿れ。

禽啼さうくものり蔭にして

草刈りくらす牧の子よ。

かくも静けき野邊にして

萎しはれ勝ちなる汝なが眉を。

濃こきよそはひを慕したふとも

薄うすき運命さだめをなげくとか。

蓋すにねむれるしばらくも

先づ知るにがき世の運命。

のすだく
など、よ
く詩人の
材となる
ものぞ、
この篇を
詠んでい
とゞをか
しく思は
れにき

さらすは牧の朝夕を

花なす頬ほのはゑみ

あゝ眼をあげよ野に山に

甲斐なき思ひ打すてゝ

人の世遠き野邊にして

静かにいこへ草の上に

道避よけすぐる少女子せうむすめが

深き思ひを偲しのびてか。

愛の光りはこもれるぞ

春の光りを仰あかずや。

神はめぐみを敷したるを

自然は人の慰藉いしやなるぞ。

○述懐

紫に霞たなびくあした、又美しき櫻月夜など、世に詩人は、こゝにかしこにさまよひて、妙なるうた詠みて、自ら心ならさめつるなら

いかやうにもいはるゝものかな

よく形容せしものかな、われは圖點のくだりこそ、いと喜べるものぞ

ん、言葉の泉かゝる時なく、美しう限なき大洋のごと、世の人々にもてはやさるべきうたを、詩を詠するうた人、實にうらやましともうらやまし。

はてなき大空なる奇しき雲のたゝすまひ、又滾々として流るゝ水、あるは東の空薔薇色になりて、残んの月淡く風なきに、櫻の二片三ひら散るあした、あるは緑深く若草もゆる野邊に、平和の色に朝日のかゝやける、あるは曙白き東海のはとりに、西にかゝやく夕ばゑの色、さては霧とめし野路の松庭の玉椿などを見ては、自然の美妙のいかに貴きを思ふなり。されはわが思ひはひくゝ、詞は拙なし、理想の泉かれて我が才そもいづこにかあるらん、あはれ我が行手や

實にしめるべきにこそ

能くも氣のつかれしものよ

結び得て妙

いかならん、ひくゝ才なきわが身、かくてこのまゝくちはつべきにや。

神のさとしか、勉め勵めと、耳にさゝやくこの聲、あゝ、今ぞ胸の雲はれにける、貴き歌人の天才をうらやまで、つとめはげまん長しへに。

あゝ、彼のハリッツイを見ずや、精神一到何事不成、いざ勉めてんいざ勵みてん。

見上れば、幾多の星は望みの光りにみちみちつ、情厚き月の女神はしづかに我を照らしぬ、庭のさくら心ありげに、ひらくと我袖にちりかゝりぬ、折しもさとしある如く聞ゆる上野山の鐘の聲三つ、

秋といへば、かくも蕭殺たるものなるにや

これ詩人の秋を秋とすると無限の感あり

しばしつきやんで、つゞく又幾つ。(重田 ばる子)

▲秋の聲

とどろと地を動かして

颯々そらを掠すめてし

魔の手に鳴れる弦かそも

粗きは怒濤海には

見よかん神のむねさけて

色あるものに凋零の

されば詩人は星にさけび

天と地とを接きにし

鐵騎陰山より來る如く

黒雲驅れる魔の如く。

律呂すさまじ秋の聲

細きは吹雪をか泣く。

形象あるものに揺落の

嵐と霜をなげうつよ。

やさしき小女は萩になき

人の花まづくだけたり。

恐ろしからずや春の領

ひとり嘲るあきの聲

人は盲いてくつがへり

とはの生命を汝れに歸しける

(津倉亮一)

○繪葉書桐一葉

この般のさまは、多くあるためしな

今は昔、さるやんごとなきかん方の座おぼしたまふ某院に美しき沙彌しゃみありけり。腰衣あかぢほに閑伽桶あかぢほ持ちちて、散松葉掃くものごしのゆかしさ、誰も思ひよらぬはなし。門前の花屋の娘にお花とて、ことし三五の月の色、雪の肌はだへの眼もさむるばかりなるに、佛にかこつけて花を買ふ人も多かりけり。實に人の世は春來れば水ぬるみて、落花流れ、いつしか匂ふ花の心は、浮世を外うきよの墨染の袖に通ひぬ。

落花心ありとも流
水の情な
ければい
かにすべ
き

名さへ花
といふ、
その人は
花の姿な
りとも、
心の香り
の匂はぬ
こそうら
みなれや

院の庭巖しければ、一人歩きの六ヶしき沙彌の姿は、少女の夢にあ
らはれて、寤めての後の果敢な染みく身にしみて、枕紙ぬらす
夜よく堪え難く、せめてもと朝三暮四、かいま見んとて立くらせ
ど、秋風徒らに枯葉を巻いて、かすかに讀經の聲のみぞ聞こえたり
ける。

冬の夜の火だね、さては澁茶などの無心に、隔てなうなれる寺男の
お花坊はこのころの顔色たゞならず、さては誰れしもある戀にやつ
れてかた、それら指されてうらはづかしく俯向けるを、など隠すべ
き筈やある、花山僧正をそのまゝの沙彌、無理もなしと笑はれて消
え入るばかりなり。折から音なくも散るの桐一葉を取り上げて、こ
れに文書かれよ、届け得させんといふに、こゝろ時めきて、言なく
ちよと拜みて、京の土産の紅鉢に筆染めて、かねて好めるわざくれ
の朝顔の大輪をかしう出来上りて、拙からぬ文字の『あはれ一村雨』
をあはれに贅しける。

露のひぬ
間に比べ
けるなら
んには、
何とてそ
の人を得
さばさん
とはせざ
りしぞ

水は冷かに流れて、花の心は仇となりぬ、沙彌はその日より姿かく
していつち行きけん。なげきのあまりお花は物狂はしうなりて果敢
なくなりける時、庭の桐葉ことごとく落ち散りぬとぞ聞えし。
遺物は一枚の桐の繪葉書、佛前に供へて朝夕門主の誦經いとたふと
し。さるからにいちらしき乙女心の世々うたはれて、あはれの筆の
すさび、今の世の流行とはなりけん、人訪はぬ蓬か宿にも、玉をか

繪葉書の
はじめと
も見るべ
きか

しぐ金殿のおん奥にも、羽根なき身のかろくくと飛びありきて、情
をかたり景を語る東西南北、これも昭代の餘澤、もとは桐の一葉に
畫さし乙女の涙しのびたまへところ。

▲蟲籠

千くさ花咲く廣き野の

露にやどりて夜もすがら

心のまゝに歌ひたる

そのたのしさを忍てか

狭きをかこつむし籠に

かことかましや哀れ鈴虫

月のひかりも清き夜の

風のしらべに合せつゝ

おもひの儘に歌ひつる

其の樂しさを忍びてか

小さきを恨むむし籠に

かごとがましや哀れ松虫

秋のわれ
に適ふあ
り、何ん
ぞその狭
きを唧た
んや
月光風韻
これわか
小生涯

狭く小さきかごの戸を

あけて放ちし其夜より

むぐらみだるゝ我庭の

彼處に此處に止まりて

したひよりたる友達と

嬉しげになくむしの聲々

○小品 三則

紫將軍

將軍は有名なる海老茶將軍の弟なり、常に紫袴を穿つて此名を得た
り。星童と號する名馬にまたがつて、天下を蹂躪せんとするの勇氣
優に兄海老茶將軍をしのげり。
常に座右に備ふる軍法の書は、『魔風戀風』として、愛の神より授かり
たる珍書なりとか、將軍は之を讀みつゝ、一日に頭大の焼芋十五個

何んぞた
ゞに虫の
みならん
や
名馬の號
ほをかし
敲は早稻
田にある
乎、本郷

にある乎
を食す。 (織田 黒潮)

戀愛

深夜の會
その要や
知るべし
斯の如き
に別離あ
るは自然
の理と知
れ

貴郎！貴嬢！と角帽と庇髪とが、人足少き公園に、嬉げしに、且樂しげに、戀愛を語らひつゝ、そゞろあるささせるを見た。

お、戀愛そも何物ぞ
翌る夕に、悶の胸を懐いて、江堤ぬぬ、別離を悲みつペンチにて、抱かれ抱きつあるを見た。 (武内 文七郎)

お月様は丁度

お月様四
時の顔芭
かくみあ

春のお月様は丁度——庭の櫻の散り初めた頃、お隣の綾ちゃんか、一人のお母さんに死なれた時の顔とそつくり。夏のお月様は丁度——

りけるか
な、去り
とては姐
娥の心根
いかにあ
はれに思
はるゝに

姉さんが初めて遊學を許された夕、湯殿から出た儘、柳に寄添ふて空想に耽つて居た時の顔とそつくり。秋のお月様は丁度——墮落の好標本たる従兄の勉さんが、妹を口解いた時、妹が嚴として撥付た時の顔とそつくり。冬のお月様は丁度——變死した老婆の顔を、初霜が化粧したのとそつくり。

秋風

秋をかなしと云ふ勿れ
空をいろどるゆふ映に
無言のさとしある者を
明よりやみに變り行き
少より老にうつりゆく
その夕暮のあきのそら

断腸
然りく

過去と去來と繋ぎたる

現世の想はもろくとも

この句は
願意をよ
くいひし
ものぞ
さだめて
これ二九
からぬ乙
女ならむ
その容姿
見るがど
とし

たゞそれ
君に寄せ
んのみ、
妬ましと
ないひた
まひな
樂しき天
使を握へ
來りての
弄びは、
一段の餘

よどみに浮ぶ紅葉もみぢばの
行末遠く身はながく
盡せぬ魂はかへり來て
やがて若葉と句はなむ

終りはものゝ始めなり
なげなばつらき人の世に
望の光りはのめかし
秋には春の芽さゝすや
しばしは映ゆる西の空
遠く消え行く夕日影

○春の川

暖かき春日を浴みて、清く流れ行く春の川、万象の秘密をさゝやく
せゝらぎ、天涯颯零の孤客をして、轉た悲憤にたへざらしむ、綠若
き柳の下蔭、衣洗ふなる美はしの乙女の、何かは知らぬ花一枝折り

て髻上に挿るか、水にうつるかのが姿、幾度か偷み見るも誰が爲め
に春を飾らんとにや。かざしの花の一片二片ひらひらと散りて瀨に
浮びたるが、衣を宿りに流れ寄りて去らんともせず、あはれしみじ
みと其衣に香やしむ、乙女が心も姿も水に解かせて濯ぐなる此衣
さて誰か着るらむと心妬たしや。
上つ瀨に綸垂るゝ村のうなる子、その針やなつかしき母の賜ひし、
其綸や慕はしき父の賜ひし、啻ならぬゆかしのさまや。この汚れな
き天使の爲に、命を捧ぐる魚數尾、潑潑として籠に躍るに、蜀を得
たらむ思ひして、晝の食事も忘るゝならむ、地にひける影のいと短
かきに、歸らむともせず、鈴張れる眼に竿頭を見つめた時々、笑を

情を多
らしむ

その抱負
はよし、
たゞ戀の
穴中に擾
さるゝ心
根は、い
かにく

洩すなりけり。あはれ此兒が家路の得意やいかに、今宵の夢や又いかに。

嗚呼、長へに流れ行く春の川よ、心なく見ゆる汝にも、またその源をおどろが下に尋ねなば、豈しぼるにも堪へぬ露けさの、双の袂に宿ることなからむや。さはとて今更に不遇を説くな、我れもし天下の權を得て、櫻を濯がんの日は又共に逢はむ、然らずば郷土數畝の田を耕して雲より暮るゝ夕、鋤を洗はんの時又相見ん、それまでは健在なれ、汝が流れ行くさきは濁り果てたる塵の世の中、幸に心せよさらば。

中澤
雲鶴

○春の夢

匂ひたばるゝ緑り野の

春をうたへるいさゝ川

三ツ四ツ二ツ花ひらを

のせて行衛は何地かよ。

さしに影さす桃のはな

ゑまひは神のゑまひにや

いづちの森や來りけむ

小鳥のふしも面しろく。

浮世をねむくこの里の

すすれの床にたゞ一人

ねむれる雉子の頬の上に

とまりし蝶の一つがひ。

いづれのどけき村里の

飛び來し蝶を友として

眠れる雉子のたどり行

夢路やいかに長かなる。

浮世の塵にまみれざる

まだうらわかき幼子の。

夢となるべきその夢は

げにもものどけき春の夢。

春光の可
憐なる、
何んぞこ
の詩なか
るべけん
や、何ん
ぞこの夢
なかるべ
けむや
春睡そゞ
ろに暖か
なるを帶
ふ

君とは果
して誰れ
なるか、
金縁先生
か、ハイ
カラ先生
か、
君！昨日は何故来なかつた。

○飛 信

君が来るだらうと思つて、僕は一日待つて居たが、到頭待だけといふ有難い目にあつたのだ。然しこれも今年になつて初めであるから新年の餘興と思つて諦めはするが！、君は全體昨日如何して遊んだ？

ハテサテ
平素がそ
の様な先
生であつ
たのか、
無論戀に

僕は恐る、君は昨日、海老茶式部、紫式部、廂髪君、金縁眼鏡、コスメチック、ハイカラー諸君の群に入つて、「戀すてふ我名はまださ……」とか、「我戀は色に出にけり……」とか何とか云ひ、時々「アラ貴君ひといわ」「真個よ」と、奇妙な聲で怨じられ、變な眼付

朽ちなん
名を惜む
やうな先
生ではあ
るまい

で睨められ、揚句の果が散々娘子軍に破られて、大の男、最醜の狀態を演じながら、這々の体で逃げ歸り、昨夜はよつびて一睡もせず如何にせば、名譽恢復が出来やうか、斯うしたら敵が敗走するだらうかと、來るべき會戰の策戦計畫に考へ明したのであるまいかと。

良知已あ
り君たる
もの、幸
や多し
斯る柔弱
なる外交
手段では
前途實に

然し君！今日の青年、果して斯くの如き事に、貴重の腦味噌を徒費して好いだらうか、理想、觀念も碌そつばない海老茶輩に、外交の秘術を盡して交つた所で、大した利益もあるまいじやないか。女子の優柔は咎めないが、男兒は今少し男兒らしく遊びたいものであるね。

想ひやら
る、

益友なる
かな君、
よく導き
得させて
よ

大袈裟と
いひたま
ふな、こ
の心こそ
失はで

〇〇〇〇。〇〇〇〇。〇〇〇〇。〇〇〇〇。〇〇〇〇。〇〇〇〇。即ち今日の一日を賭して、近郊遠足を試みんとするのだ。準備は、脚絆に草鞋、但し靴でも差支ない、辨當は握り飯、傘一本これで澤山だ。

君と五六年前徒歩競走をした事があるが、それ以来僕はあまり遠道は歩かないけれど、未だ〜大抵の者には敗は取らぬつもりだ。そして洋々たる大海を眺め、渺茫たる廣野を馳驅して、充分に英氣を養ひ、他日困難のある場合は、眞の外交術を現はし、眞の戦術を講ずるの素養をする心算だ。少し大袈裟だが笑ひ給ふな。新春の氣焔は先づこんなものだ。ハムハム

免に角此手紙着次第駈けて來たまへ。晩には初夢の好いのが見られるよ。失敬!
(宮本 北穂)

▲君と我

野邊吹き渡る春かさに

一つの籠に二人して

水靜かなるさと川の

笹舟つくりながしては

あゝわが戀は若ぐさの

あゝわが戀はさと川の

ふかき戀をも奈にせん

ふりわけ髪を靡けつゝ

若菜つみけり君と我。

流れに四つの袖ひちて

ゑまひ戯れし君と我

みどりと共に萌にけり

流れのごとく深きかな。

君にあかさんすべを波

戀のもゆ
るは若草
のみるる
より甚だ
し

若き子女
の友とし
好きさま
見る如し

色に出で
ける戀は
まだ出さ
る戀より
はふかし

白髪三千
丈の意な
るらめ

それ然り
豈にそれ
然らんや

人心鏡の
如くなる
ときは既
に醒悟の
境に入る
ものぞ

いはての杜の紅葉々の
二人あそびしむかしべも
あはれ樂しき其の夢を
二人手をととりあそびてし
かくも苦しきおもへをば

獨りおもひに燃る身の。
おもへば春の夢なれや
うつゝに返す由もかな。
其の昔べのかへりなば
あかさん由もあらましを。

(伊藤真砂)

▲鏡花水月

とるやくしげのます鏡
ありとおもふは迷なり。
深山のおくのたに水に

うつれる花の影を見て
沈めるそらの秋のつき

まことゝ見るは迷なり。
嵐にはなのうつろへば
残れるかげもなかり
玉のうてなも何かせん
常なき世ぞと覺りなば。
何か恨まんまづしきも
此世を夢とさとりなば。
鏡のはなや水の月
人のこゝろに隈はなし。

高根に月のかくろへば
花のおものも何かせん
何かなげかん醜くきも
ものみな影とささる時

○別の記

これが泣
かずに居
らるべき
これが驚
かずに居
らるべき

繼母の惨
酷なるお
もふべし

その心中
の切なき

いかなら
んや、こ
の多情多
恨なる二
子に代り
て一擲の
涙をそ、
くめり

容貌よく
生れしこ
そ不運な
れ

飛石に駒下駄鳴らして、慌たゞしげに這入つて來た芳子、「兄さん
！……」と、突然、わが膝に俯伏して泣くのである。

「如何したの」と、驚いて聞けば、「兄様妾は明日遠くの方へ行くん
です」と、振仰いだ眼から涙がはら／＼と散る、「エッ、如何した
の、夫では家族中が引轉すの」「イ、エ、妾一人で」「何！芳さん一人
餘りの事に誠とは思へないのであるが、モ一、お迎ひだつて怖さう
な人が來て居る事や、お母様が京都といふよい處へやると談された
事や、家では妾が行く仕度をして居る事など、彼は心細げに語つて
而して、はかなさうに、「兄様と遊ぶのも今日さり、妾、いやでい
やでならないワ」と、モ一、堪へ得で咽び入るので。

如何しても誠とは思はかぬ、けれ共、此子は情深い母を持たない、
いかなる運命の手に捕はれたのかしら……。

自分は慰めの言葉も知らず、只、泣くなとのみに脊を撫で、啜り
上げておの／＼襟に、熱い涙を吾知らず落すのみである。

さまでせず共、差支へると云ふのでもなし、繼母まははとして酷いひどでは御座
りませぬか、容貌の良いのが身の因果で、ほんに彼子あのこも不運で御座
りまする、生の母様が御出ならば、そんな粗末な子ではありませぬ
を——と、宿の婆ばあが泣てのはなし。

噫、京の舞子まひこに賣らるゝ身とよ！。

無言の間に多大の情緒あり交亦涙に濡るゝを覺ふ

この兄さんの多情なるは、こゝに表出し得られぬ

其夕!

例いづれのやうに、芳子と枯葦かれあしさわぐ沼のはとりに散歩した。いつも、無邪氣なはなしに笑ひながら、其清い歌を聞き乍ら、解けつもつれつ戯たふむれつゝ、楽しく逍遙したのであるけれど、彼はうなだれて語らない、ちつとたふズンでは慥しかとわが手をとつて、小さい胸に思ひ出の糸繰りかへすのであらう。「兄さん? モー今日さりね、妾、兄様と別れるのが一番いやよ」と、しみじみ云ふてはわが袂に涙の顔包んで泣くいちらしさ、「芳さん、そんなに泣かすにね、又すぐに歸れるたらうから」と、辛うじて慰めるのであるが、噫、なみだはかくすよしもない。

たゞ月にのみならんや

いつまでもこうして居たいの一語は、こゝ少女の血より出でし語

「兄さん京都つてどちらの方! 餘程遠いの!」

「あのお月様の出た方、ナニそんなに遠くはない!」

あゝ、雲の幾重に隔つるや千百里、四つの袂が別れ別れて、いつれ

涙はしげいであらう、此月を見るたびに……

涙振拂つて、彼々懐しげに吾を仰いで「兄さん、いつまでもこうし

て二人で居たい子」噫、芳子、モー此兄を泣かすのを止めよ!

吾は得堪へで葬と抱いて「何處へもやらない!」と密に叫んだ。さ

り乍ら、冷たい社會の力は、逆もわが弱き手に、この可憐の少女を

置かしめぬ! あゝ、

何處へも
やらぬの
一語、兄
たる人の
さもある
べきとこ
ろ

人目の辛
いところ
ア、さて
も多きは
讀むに忍
びぬなり

いよいよ、彼は立つのである。

小さい行李を迎ひの男に脊負はせて、小さいはばきに小さい草鞋、
旅よそほひの甲斐々々しう、胡蝶のやうな其すがた！

近所のたれかれ、見送る人の眼は皆うるんだ。

「兄さん！」と、駈け寄つて袖にすがつて又泣くのである。胸塞がつ
て涙湧けど、さすが人目の辛いのに、あゝ、なせ、昨夕もつと泣い
て置かなかつたらう……。

「夫では私は行きませう」と、彼は二度たゆたふて未だ吾をはなれ得ぬ
「さ、芳さん、連の人も待て居られるから」と、口では促せど、いや
強くとらるゝ手の、身を切るよりも別つに辛いのである、彼もやう

見るが如
し、實に
美文の妙
境

こゝに至
つては讀
むもの涙
なき能は
ざるなり

やう思ひ切つて、

「夫れではお別れ申します、にーさん！御丈夫で」は、改まるわかれ
の言葉。

「泣かすにお出で」と、吾は顔を反けたのである。

可憐なる子よ、袂で面を抑へたまゝ、とぼくと別れ行く。

だん／＼小さくなり行く姿を、いつ迄もいつ迄も。吾はそんで見送
るのである。

朝なれど、秋は寂しい、はらはらと落葉の雨の一しきり、二しきり
姿はついに見ぬなくなつた。

▲病める戀人

いひまは
しいと面
白し

死も亦運
と知るべ
きに

や言ひ
足らぬお
もむきあ
るはおし
きかな

眞の知己

君がいたづき癒しとて

かく露きよき姿をば

夕べいさよふ雲散りて

つゆの玉衣たまぎぬやふれては

吁あゝ人の子もともすれば

明日をも待たぬ淺猿あさぎまの

不治の病にかゝりつゝ

襲ふと知らでゑまひつゝ

君がやせにしその姿

月の光の照りそひて

池もせに咲く遠のはな

なづかしみつゝ只二人。

吹くや涼風はらくくと

碎くだけてうせぬ池のをも。

風にくだけてちる露の

世にさすらへの身ならずや。

あはれや君は死の神の

わがそば近ちかくたゝすめり。

懐すこくも白しろきかんばせに

尊たうきまでにうつくしき。

早や汚れたる世を離れ

半座を分けて待やせむ

露にも似てる君が身の

せめて君をし慰めむ

はちすのうてな法の雲

未來の君もかくもかな。

死の風渡るそれまでは

折るや紅白の花二つ。

(神戸酒骨)

○吾をして

一

われをして胡蝶こてふたらしめよ。舞姫まひめの袖とひるかへりては、莖すゐれに戀こを
さゝやき、地に落ちし花の姿となりては、芳草の中に眠らん。

二

爲し能ふ
べまや

われをして雲たらしめよ、朝な夕な、貧しき少女の家をおとなひて
渠が愁ひある時は、よろこびの色彩を現じ、渠が喜びの音づれを得
し時は、孔雀の尾よりも麗はしき眩耀の光輝を含みて、そが家の屋
根近く漂はん。

三

たゞ如此
のみなる
や、いか
にく

われをして星たらしめよ。懐疑の雲にとざゝれつる愁ひの人、一種
のくしき豫言を爲すべく、不吉の兆ある時は赤き色にかどやき、歡
喜の兆ある時は、白銀の色にかどやかん。

四

われは之
われをして雪たらしめよ。此罪惡と煤烟とに包まれし都を化して、

に興みせ
ん

玲瓏たる一大丘を組成すべし、朝な夕な絶間なく降りそゞぎ、舞ひ
下りて、七日七夜に及ばん。

五

可笑々々

われをして白き翹あらしめよ。曉早く雲を凌ぎ風に御して、ヒマラ
ヤの山巔に上り、そが太古の雪を噛みつゝ月の大神を迎へまつらん

六

飛び上り
てはよく
落るもの
なり、心
せよかし

われをして一葉の木の葉たらしめよ、秋風吹きすさぶ頃、風の中に
く散りおちて、身も軽く、心も軽く、颯々として空中に踏舞を試
みん。

七

その意想
や大なり
しかも

われをして海濤なみたらしめよ、四六時中、絶えず怒號し、咆哮ほうこうして、
天を蒸し、海宮をゆるがすらん勢もて、狂ひに狂ひ、猛たけりに猛りて、
月をも吞まん、星をも吞まん。

八

怪しから
ぬこと

われをして雷かみならしめよ、富貴の光りを楯たてとなす驕兒たかごの家に落ちて
金殿玉樓きんてんぎよくの美を一炬いつくに附せん。

九

その心や
優なり、
若し美人
を見なば
いかに

われをして野川の水たらしめよ、河畔かたにたゞつむ不遇憂愁ふぐようれいしゅうの詩人に
對して、日ねもす一曲いっかの卑歌ひかをかなでつゝ、渠かれの重き心をやはらげ
ん。

十

先づ己れ
の妻より
試みてよ

われをしてキニピットきにピットたらしめよ、才を誇る女に臆馬おそばの如き男を與
へ、賢をたのむ男おとこに豕ぶたの如き女を與へん。

十一

やさしや
さし

われをして春風たらしめよ、乙女の鬢びんの毛をなぶりては、戀の哀歌
をうたひ、老女の耳もとに近づきては、平和の福音を與へて、かれ
の寂寞せきぼくをわすれしめん。

十二

山中の高
士の月下
の美人に
會はばい
かに

われをして驚たらしめよ、世に容いれられざる清狂せいきやうの士を音づれて、
今が冬の如き心に無限の春を吹きこまん。
(高須梅溪)

俗に似て
雅ならず
雅にして
雅に缺く
が如し、
しかも眞
美なる雅
なり詩な
り、句々
清新、字
々艶麗
きびく
して心地

よし、評
者もどん
とうち込
みました

笛の音は
おなじけ
れど、四
季の折々
にその聞
きかたの
さまふく
なるもの

▲片身の小松

村で一番貧乏な源太さ
男らしいに自慢ぢやないが
とんと打ち込んで命もいらぬ
唐の言葉は知らないけれど
いとしかわいゝ主や出稼よ
あかね二人がまた遇ふ日まで
その妾ほどのびたる時にや
主に遇ふ氣で毎日通ふ
丁度今年で三年たつた
土地人達あ蔑すむけれど
村で小町と呼ばれた妾し
よその人達の笑はゞ笑へ
戀といふ字は村にもあるよ
泣いて別れた並木のはづれ
變らぬ誓に植ゑたる小松
さつと歸ると云はれた松に
丁度今年で三年たつた。
のびぬくとちれたる松も

○笛の音

山里の秋の景色見んとて、そよと吹く風にさそはれて、日頃親しう
する限り、さる友の家に宿りぬ。
時しも、八月半の事なれば、未だ宵ながら出る月、澄みわたる大空
にかゝりて、庭の面をくまなくてらし、雁金の幾つうも、羽打かは
し飛びあるく、一々に敷へつへし、生ひかはしたる葉末に、置渡す

いつか高さは見上げるばかり
かわいしいとしい主やまた見ぬで
松にのびよと祈りはしたが
まちにまらたる年や過たけど
妾や小松と淋しく暮らす
のびた小松が今恨めしい

(澁川白紅)

ぞかし、
さればに
や秋のけ
しきに笛
の音を聞
くあはれ
さは、い
とゞもの
凄くぞお
もはるゝ
ものなれ

白露は、百千の玉を、並べたらんやうに、いさゝ小川の流れは、玉
琴をかなづるかとおやしまれ、よゝとねになく虫の聲、扱ては、そ
よふく萩の上かせなど、よろづ山里のさまして、とりぐの氣色、
げに、いひつくすべうもあらずなん、あはれ、こよひの此の氣色は
百敷の大宮人は、いかに、たのしと眺めやせん、しつたまきいやし
き人々はいかに、憂しとや見るならん、しのすゝき昔しをしのぶ人
もやあらん、あはれ、心ある人もかな、共に見はやし、今昔の物語
など、せまほしう思ふものから、友は、めをやに、さぶらひて、な
し、夜や又いつしか更けぬらん、静かに、あたりには人のけはひも絶
えて、月のみひとり物すごさまでに、澄みわたりたるに、ありし昔

むかしを
思へ出る
あたり、
まさしく
秋の心な
れや

のよしなし事ども忍び出で、うらさびしくぞ覺ゆる、折しも、い
づこにや、笛の音聞ゆ、虫の音も、止みぬべう、あやしう妙なる音
に、耳打すまして、あな、をかしき事ぞやと、聞きつる程に、なか
くに物悲しう、足がら山の義光や、太夫敦盛の古事さへ思ひ出で
ゝ、そとろに、涙こぼれ出でぬべうなりぬ、あやし、吹くらん人の
心の音に通ふにや、はた、聞く我が心の迷ひにや、あな、たねがた
と、又打すませば、音はやうくに遠う低うなりて、虫の恨みも絶
えくに、かせさへ、静かになれりしかば、はや吹き止みしかと思
ふほどに、高うに近う聞ぬ、くれ竹のふしの妙なる、なにゝかは
たとへまし、いで、遠き處にては、よもあらざめれ、誰がすさびに

や、おとなひ見んと、稻葉をよげる細道を、やう／＼にたどりどた
りて、音せしかたは、こゝなんめりと、とあるいはを伺へば、はや
いねたるにや聲もなし、あやし、音はゝるか向のかたに聞ゆるに、
まゝあやまりやしつらん、こたびこそはと、ねにさそはれてありく
ほどに、月はいつしか雲がくれて、笛の音はたと吹きやみぬ、と
こうする間に、峯より落つる山かせの、さと吹きくるにつれて、虫
の音もかすかに聞えて、忍び塚のあたりに、螢のやうなる火のはの
見ゆるぞ物すこき、あはれ、心に忍ぶ事のなからましかば、かくも
物淋しうはあらざらましを、あはれ。

吹く人の心の空に通へばや

きくらん人のそでの露けさ

▲醜女歎

本題の如
きはこと
はつかま
いどころ
のおもし
ろきもの
ぞ
世上常に
美人の薄
命を説く
而して醜
女の薄命
に向つて

秋の初めになりぬれば
うたふ童児の聲きゝて
この年迄もぬにしく
さびしき闇に唯ひとり
妾の身こそかなしけれ
乙女の如くあるならば
蔽ん術もあらましを
瘡瘡までも身を賣めて

今年も半ばすぎにけり
たちまち起るもの思ひ。
嫁ぎかねつゝ空しくも
身の行末をかこつなる。
せめて顔だに世の常の
たのしからざる家系を。
何の因果かあなにくや
我から耻るかほかたち。

は却て同
情の涙を
濺ぐもの
希なり、
この詩此
先天的薄
命者の爲
めに泣く
字々同情
より得た
り

月が取り
もつ縁か
いな

と唄は
まし

結末妙に
入る

物のあはれは人よりも
戀に思ひは燃ゆれども
もゆる思ひも何かせむ
かくて秋ゆき冬さりて

▲君と我

稀に逢ふ夜のそれも亦

親はらはらの夢の間に

遠き野末にまつわれの

稀に逢ふ夜の嬉しさに

月にはづれば月もまた

深くぞ知れる知れる故
こはるべき身に非れば。
あはれ鮑のかたおもひ
今年は又も暮るゝらむ。

小夜静まりて人はいね

よそめを猶も憚かりつ

こゝろを獨り君がしる

手を取替はす面かけを

許すさまして照り給ふ

こよひはかくて長へに

廣野の中にたゞふたり

千草の色におくつゆの

あふぐみ空そらに限りなき

若しや其處そこらに佐保神の

顧みすればをちかたの

うき世に遠き此野邊に

いはり結びて末ながく

明すもあれや長しへに

夜はしんくと更さらに覺さ

そのいろくくに月宿り

秘密の色のこもりつゝ

おはしはせぬかと許に

野末に山のかげあはし

あはれ明日より率いそや率いそ

神につかぬむ君と我と。

○二人連れ

わしが心はね！わしがこゝろは舞子が濱よ！

これも誰
ゆる、皆
んな二人
の心から
若し両親
の見玉は
如何に
玉ふら
ん

戀の墮落
生が困じ
はてた結
果は、い
づれもこ

ほかに氣はない、まつばかり、サ、ホーカイ
凸凹な田舎を、鼓弓と尺八との合奏で、覺束なげな節に、哀れをこ
めて流して行く編笠の二人連れ。脊の小高い方は男で、十字紵に大
柄な袴を高くかゝげて、毛孺子の脚絆に尻切れ鞋の、眉の秀でた、
色の淺黒い二十七八、女の方は汗で煮めたやうな縮の浴衣に、同じ
く白地の袴、傘かなんかであらう、筒袋に包んだのを、肩から斜に
背負つた、色の劃然と白い、鈴張眼の二十前後、水色天竺の襷を、
キリ、と小氣味よく綾取つて、これも脂で色褪せた緋毛斯の袖口が
その眞白い、纖弱さうな腕に絡みついてゐる。
合奏の音が、絶えずこの閑寂なる田舎の空氣に、微妙な振動を傳へ

んなもの
なり、た
まかくて
も生活し
得るかそ
れだけ殊
勝とやい
はまし

問答の間
いと實況
に入る

て、何處からか鶏が一聲、消魂けたましい聲音こほねを立てた。と、男は何思つ
たか、急に合奏の音を止めて、つと慳貪けんどんに、尺八を一振り高くふつ
て。
「厭になつちもう、ねいお秋、今更ら望月もちづきがおもひ出されるだろう
ねい?……
「何んだねい、この人は、今更か前さんのやうにもない、人、笑は
かすなさんなよ……
これはまた一向平氣で云つて、その艶麗な、寧ろ凄い顔で男を覗き
入つた。
「へム、これも戀故かね……

この歌は
人に聞か
しむべか
らず、さ
だめて戀
中の端緒
なるらめ
いかなる
お轉婆も
さぞ仰天
せしなる
べし

と嘲けるやうに云つて、今度は自暴ヤロに一聲高く、

これも戀故ね、！これも戀故、お前ゆるゑ、

今じゃ、家ごとの、軒にたつ。サ、ホーカイ

やがて、二人は彼方かなたの土橋を渡りて、まばらになつて居る草屋の小
道をづゝと縫つて、一きは高い大きな榎にその歴史を語つてゐる立
派な白壁造りの門前に立ちどまつて、見るともなしに見あげた、焼
物の標札には、麗うるはしい手蹟のそれで、農學士望月達也。？
二人は、何がなしに立窘すくんだまゝ、少時は身動きもしないで居る。

(横山汎子)

▲忍ぶ戀

こひにはのめく我が思

君に聞ゆるよしなくて

けふこの頃の春がすみ

わびしく暮す此身には

花に戯むるてふ見ては

ゆかしき莖の花見ては

思ひあまりてはらくと

知るや知らずや君は抑

すこしは思へ戀になき

積りて山となりながら

いとゞ思のますかどみ

人皆はなに浮かるれど

それさへいとゞ悲くて

いやまし狂ふわが心

唯かなしさに堪へ兼つ

落ちて聲ある熱涙を

まこと情けの心あらば

命ちたぬなん人ありと

(岡島尾花)

忍ぶ戀こ
そ切なき
はなかる
べし、こ
の詩を詠
まん人は
誰が同情
の涙なが
るべきや

○艶 聖

いとも氣
樂なるこ
とばかり
なるぞを
かし

聖とて、
何んぞ五
戒をのみ
守るにお
いていは

んや、今
の菩薩界
多くはみ
なこれな
り

その仰天
のさまさ
こそと思
はるゝ

花も散りはて、うの花くらしの間合、日うらゝかなるに友どらみた
りと、やことなき聖許ひじりかりまうでけるに、喝食かつじきのひじりは、今垣隣かり
ゆきたり、たゝちにいづくべしまづ座につきたまへ、と面知るから
にまめくしくもてなし、書机すへたる處にしようじて出行きぬ。
隔てぬなかのことゝて、淺間山の煙ふかし、宇治山の木芽このめすゝり、
押板の上にかけたる繪をかゑなんばうの繪難坊にならひて、口さがなくのゝし
り居るに、さうじ外にさゝやかながら物のはねおどる音す、座しき
のたれかれ、あれは何ぞと耳かたむけぬるに、寂寞たる深院の午す
ぐる頃なれば、いよく靜なるに、其靜さを破り、さゝやかなる音
はますく加りぬ。一人のしたゝかなるものつと立て、日蔭うつり

し障子おし明れば、阿伽棚あかたなの檜桶ひききに筐かたみをうつぶせたるものより、さ
さやかなる音を發しぬ。かの男、筐をとりてうち見るに、鰯いわし、鯉こいの
類ざこの雜魚の、いくつとなく檜桶のうちに濺刺たるなり。あまりのこ
とにとも言はず、筐打ふせ、障子引立もとのむしろに座をかまね、
扇あらゝかにつかい、いきつぎ居たりぬ。やがて聖の歸り來り、此
頃の花には來で、心にくゝも杜鵑ほととぎす聞かむとてか、とて折敷せしきに菓くさ
ぐさとりそろね、瀝子土器へいし かはらけ持出しぬ。人々好めるからに、土器かす
重ね、早うたや謠うたひ出す者さへあり。あのしたゝかなる男、聖のかくね
んころなる振舞にとふべ酔ひたり、ゆば豆腐の味もよけれど、今は
何をかかくしおわす、かのものを此の座敷へとくく出したまへ、

聖も今は凡夫に及ばざるなり

世は捨つる時は心は未だ世に捨てられざるなり

この座敷にある程のものは、とくよりよく知りたるなり、などとそらぐしく鼻白みておわす、とくせさせたまへ、と。せちに乞ひければ、聖はいとく困じたる面もちにて、かく殿ばらに知れしからは、今は何にか包んで庫裡のそうじ押開らき、やよわで前とく出で人々に酌まふせと、聞いて一座呆れて目を見合せ、興醒め、聖をれほどまでのことに及ばず、只かの閑伽棚のもの、調理こそ所望みしまでなり、あな無さん、おぞくも我佛の尊き破羅蜜をもらしたり閑伽棚のあかたな小魚、それはどの事なにかあらん、とて羹にとのへて出され、尙土器のかすをつくして歸りたるは、わさましきことにこそかうかたの世捨人はなべてかゝるたぐひなるか。

名句

同じくこれ星なりしかもこの凄愴の情はいかに悲しくやあらん

芥子さげて都の尼のうつくしき

○冬の星

四極八荒を吹暴れた大雪のため、前方は灰を撒いたかのやう、夜は眞の闇である。こゝにある岐れ道に微かに左奉天の三字を記した極く古い、半倒れの木標がある。その傍にしよんばり二人の我兵士の姿が見へる、非常に奮闘でもした後か、全身血浴みれ、血達磨並列と云ふ状で、見るだに凄^{すこ}い、要領は得ぬが、時々母上がくと聲がある。寒そうに巽の空で屈んで居る星は、この話を聽いて居るのだらうか。

森崎綾翠

○白芙蓉

ハイカラ
美人を相
知るその
人は、蓋
しハイカ
ラ學生な
るならん

携ふる人
はいかな
る人か

桐の一葉がバカリと落ちて、秋風何となく淋しう思はれる窓に、僕
はぼんやりと物思ひに沈んで居る。

すると生垣越しに、向ふの廻り角を、クルリと此方へハンドルを向
けて、チリンと鈴をけたましく、現はれた自轉車美人の姿、袴は
紫、清い細面に、匂やかなる眉、涼しい瞳、僕はハッと思ふ中に彼
方へ……慥かに彼女は……と透して見る簪に……花は、おゝ、それ
よ見覺ゆの白芙蓉一輪……。(戸田青雨)

○忘れな草

盡くべき名残にはあらざれども、責めてはこの一日を思ふがまゝに
語らばやと、手を携へて、色づき初めし秋の野を辿り行く。花あり

聖書に戀
の忘れな
草をばさ
むとはい
かに

やさしく
もまた、
あはれな
る歌也

大いさ米粒に及ばず、五瓣にして藍色なり。友は摘みて吾に示しぬ
怪みてその意を問へば、眼を霑して答ふらく、吾今君を置きて遠く
東に行かんとす。昨日を想ひ明日を思へば、轉た斷腸の感あり。願
はくば之を書間に納めて、夢、吾を忘れなよと。かくて五年。聖書
に挟みし藍色の花は、云ふが如くその色を變せざれども……

▲緋 襖 紗

惜しき別れの其ゆふべ 菊の薫をたきこめて
紀念にさゝげし緋襖紗の 今宵泣けとて戻りしか。
色も匂もあせやらぬ 笹へりとりしむらさきの
糸に情けはこもれども 包める骨をいかにせむ。

多情多恨
さだめし
玉の如き
人ならん
餘音願々

それよ小胸に波立ちて

わが名を縫ひし爪紅つまべにの

幾○歳○有○情○の○み○袂○に○

低○き○ひ○ど○きの○籠○り○な○ば○

隅に小さく「光より」と

指にもおのゝき覺しが。

忍○び○て○眞○似○し○優○歌○の○

せ○め○て○一○節○も○ら○せ○か○し○

(大高謙一)

○深山の奥

(一)

吾れは行くよ、あゝ吾れは行くよ、いづこ迄も吾れは行くよ。

春の氣かをる、新緑の下蔭、去年の落葉うづ高き、幽かなる小道、
縫ひてく、昨日も今日も、あゝ止まる果てはいづこなるらん。

深山幽谷
の境をう

(二)

つすどこ
ろ妙とい
ふべし、
しかもそ
の境にあ
るさま、
いと優し
くもある
かな。

立てり、老幹千株矢の如く立てり、上は滴る青葉、下は山なす朽葉
仰いで雲を見ず、俯して土を見ず、悠々たり森の姿、寂々たり山の
心、耳に風なく、目に雨なく、山動かす、聲揺かす、人外遙かなる
幽寂の裡、吾れ一人行くよ。

あゝ似たるかな、静寂の境、太古無人の清き姿に。知るか人、あゝ
この神の淨地。

迷○ひ○入○る○幾○里○の○山○の○奥○、
木○樵○の○道○も○今○は○微○け○し○

(三)

天も言はず、地も語らず、閑々たり、沈々たり、万物皆枯静、さて

その人の
心ばへも

おもはれ
て、いと
沈殺の情
を動かせ
り。

も静けきよ、山の奥。
只あり吾が心。森の精と山の靈と、黙々として相語る。
あゝ吾れは山を愛す、吾れは山を好む、迷寂なれば也、峻乎として
千年の姿、欺く事なければ也。

(四)

君ひとり
戀と愛と
を知らざ
るか

誰れかはいへる、人の世。吾れには忘れ果つべき人の世ぞ。戀の花
愛の泉、いづれ夢なるうつし世に、何得んと人は狂へる、人は悶々
る。
さはれ吾れも。あゝ、暫し回想の夢、然り、夢なりき、人の世の夢
なりき。云はざれな、云はざれな、とことにはにこの思ひ、偽り多き

戀愛の情
に充々た
るか

る結果が
この厭世
的思想を
惹起せし
は外なら
ざるなり

人の世の、今更らに何してか、思ひ出でんとはする。吾が友は山な
るを、幽寂の山なるを。
あゝ汝れや、崇巖の山や、汝れは一度も吾れを欺かざりき。あゝ汝
れは、永久に吾が唯一の友たるべき也。

(五)

あゝ益なき思の、辿る細道、木樵の痕のいよく微けし。
さても吾れ、いづこ迄行かんとする。

小さき泉、小さき手に掬びにし、濁らずの小さき泉、尋ねて吾れは
一人行かんとする也。
涸れざれな、深山の奥の小さき泉、苔むす青き岩間を、ちよろしく

まじしく
厭世の人
まじしく
戀愛以外
の人

一篇散文
の詩、才
情人を刺
す。

と銀の玉流す小さき泉。十年以前の幼時の思ひ、今吾れを驅りて、
汝を訪はんとす也。
新緑の香の凝りか、雫一つ落ちぬ。

(六)

幽寂の裡、山の靈と只吾れ語りつゝ、路なき小道、縫ひてく、吾
れは行くよ、いづこ迄も行くよ。

清き白百合咲ける、岩間の銀の泉、見出でん迄吾れは行くよ。
(加藤 荆峯)

▲あはれ乙女子

林檎はみのる園の中
夕陽のひかり燦として

なりはひ
生業成りしあきの野邊
しかも哀しきくれの色。

老翁と少
女を點
出して、
その清愁
の状をう
つすとこ
ろ妙の妙
なるもの
運命の神
はいかに
この老翁
少女に幸
すること
なや
冬情多恨

草舎の前にくづをれて

清き乙女を見やりては

近くもあらず遠からず

遠くもあらず近からず

やがて翁はさゝやけり

わが兒を君にさゝげては

枚場にみつるわすれ草

せましくもあらず草園は

翁の倚子はむなしくて

うれひにしづむ翁あり

胸の煩悶をしづめける

はるかに鳴らす喇叭の音

はるかにひびく陣太鼓

運命は人にはかられず

われ等は神にいのるのみ。

戸外に茂げるばらの花

くれなゐの花亂れ咲く。

草舎はくらく静かなり

幽雅にし
て而も情
緒に富め
り

尚ほ罪作
らん残ん
の色首

新戦場にはか見ぬて

こ山の下に又ひとつ。

父は逝きたる兄もまた

よるべすらなき乙女子の

冷へしかまどの傍に

一人淋しくたゝすめば

すみにかけたる古時計

時をば重くさざむなり。

(小澤天山)

○戀しい昔

眉の青い、色くつきりと白い、三十路の女房、葉櫻茂つた家の小窓
に近く、今しも蟲干最中、帯、着物、いろく、美しく掛け列べられ
たが、ふと羅一枚手に取つて、はッと思つたらしい顔は、やがて、
にッこりとほゝ笑んだ。何？、紅の跡？

(奥瀬 霞翠)

愛らしき
風情、他
日如何に
人を惱殺
するやら
ん

有情の男
兒、この
無情の花
に對して

○白百合

日光もうぬ大楠のもと、ハンモックの中にやすくと寢入つてゐる
愛らしの静ちやん、歳十一、可愛き手に持つた白百合の花……
おゝ笑つた……夢か……百合持つ手はふと上つて、花バサと、紅の
頬にふるれば、薔薇の蕾の如き唇が少し動いて、コッリ……

(新井春治)

○あはれ此花

昨夜寒風獵々として、肌に硯する遠北の空、余は偵察の任を帯び、
羊腸たる石塊の小路を辿るなりき。月は冴えたり四山寂寞。余は河
床の剣岩に危くも倒れんとしぬ、吁其刹那！何處の山よりか轟然一

幾多の感 涙を生ず 可愛可憐 妻なる人 これをい かに聞 くらむ、 見るらむ

發、ヒユツと聲して余が頭上を飛びぬ、時しも余が前にはろりと落
ちぬ寒梅一輪、末のそれなるに。
あはれ此花、余が片見とも思し吾されよや、吾妻よ、余は辛くも命
を保ちぬ、されど明日は此花の如く……
あはれ此花！妾は幾度かろくく、吻けぬ。
あはれ此花！永遠へに萎むな？

▲ちる花

夢より淡くちる花に

書よむことのもの憂くて

ゆふべの窓に倚りぬれば
春の日しづむ彩雲の

空想に耽げるまぼろしや。
紅は榮あるいろなれど

残花をも て人世に 比し、終 にわが身 にくらべ ての御言 さまあり なん かならず しも然ら んや

幼くてらす夕星は
詩にやつれしわが頬に
人のこの世に生るゝは
かれ今何の罪ありて
世に秀才と謳歌はれて
社會のさか潮に漂泊て
人の運命のおはるごと
薄光幽寥しきゆふ風に
神が諭示のこゑならん

深く瞳にさざむとも
知らずや闇の襲へるを。
髪はおどろに亂れたり。
自然の愛子と生るなり
憂愁ある子と生れけん。
詩に遊びしわかき身も
わすらひ多く老し哉。
夕日を覆ふくれのもや
祈禱の歌もちからなし。
胸の小琴にひびきては

木箱はなれて散る花の

音をば聞くにほ堪んや。

(董 雨)

○秘めし戀

姉たるもの何の顔あつてか妹に見へんやだ

ア、解らない？お母さんや、自分が止めるのも聞ず、日頃孝行な姉様が、死ぬく病でるお母様を残して泣く程悲しい者を、なせ篤志看護婦とやらに成られたのだろー、と思へば思ふほど、姉の心が分らない。

看護婦たらんと望みし芳子の心事、

何氣なく姉さんの手箱を開けて見付た、筆の跡鮮かに、戀しき芳子様へと認めた、文に余る千尋の文。前に廣げて首をひねつたが、文の主はどーしても分らない。

秘せんとして既に妹に知らる、爵、隠すより顯はるゝはなしか

姉が手植の黄菊に過ぎし昔の偲ばれて、ボンヤリと丸窓に凭れて居た時、舞ひ込んだ郵便、痛手負ふて入院してから、芳子様が懇篤な看護を受けて、嬉しいと云ふ謝状。差出人は曹長吉村光雄、ハテ見た様な筆跡だわいと、首をひねつたが、ヲ、ソレと心付て主知れぬ文、二つ並べて腕こまぬいた自分「知れたッ」と、吾れ知らず手を打つた。

一年有半解らなかつた姉様の心と、文の主が漸く……。(和地 芳仙)

○放蕩學生に與ふ

當世の書生は滔々として多

放蕩なる學生よ、汝が郷を辭し、決然笈を負ふて、遊學の途に上りし當時の有様は如何、其の思想は、露間に滴る水の如く、滄海に浪

くは是なり、憾なきべきかな

三十棒ほどの利目あるべし

幻ならばまだしもなり、現

うつ潮の如く、清且つ淡、一滴の濁流たも混せず、清淨純潔、學若不成死不歸と放吟しつゝ、郷關を發せしならん。されど一度足を都門に入るゝや、前の思想は果して何處の邊にか在る。かくて貴重なる幾多の歳月と、故郷の父母の勞働の汗の塊なる幾百の學資とを費して得たる肩書は何ぞ、曰く『放蕩學士』、實力は如何、曰く『不夜城内を蹂躪するに足れり』と、嗚呼、壯なる哉、放蕩學生。

▲まぼろし 一、

(薄田泣菫)

葉こそこぼるれ神無月

かゝる月なりき、――

黄櫨はじの木かげに俯居して

戀かたりする人を見き。

二、

葉こそこぼるれ午ひるさがり

かゝる日なりき、――

かたみに人は擁いだきあひ

接吻くちゅにこそ酔よひにしか。

三、

葉こそこぼるれそのかみの ふたりのひとり、

ふとありし月のまぼろしを 吾かの様に見はけぬる。

○春の姿

春の景色を人に譬へなば、二八の少女、さも愛らしく、何んとなう氣のうつるものにて、綠蒼々たる草木、その花は姿の如く、又、寒暑なくして吹く風のやさしきは、乙女の言葉にも似て、木蔭にたは

實ならんには果していかん 観るべし

多少の詩味あり、たゞ平凡たるをいかにすべ

この野守
の如き人
は實に多
し、され
どあまり
に心多く
て、その
戀は終に
叶ふこと
なしと
や

むるゝ鳥、空をかすめる鳥の美聲は、乙女が歌ふに似たり。庭の櫻
花のそよ吹く風に飛び散るは、女のもろき心に譬へんか、野に一面
の菜種に胡蝶のたはむるゝ狂態、又何にたとへん。(孤峯山人)

○戀の野守

野川にけふる柳の緑、一丈たれて、風もなきに、雲雀は落つる五寸
の麥生や、馬子の小唄も霞みゆく春の野へは、かなた山畑うつ菅笠
の、動くともみぬぬ長閑さ、さるにても、この日永さを、何を苦し
みての野守が悶もたねぞ。見よ、小鳥に目醒めて月に臥す樂しき門べに
若き血めぐる身をよせて、ほゝ笑めるを。それも束の間なりしよ、
野守は己を嘲げること叫びぬ、苦き聲もて。……あゝされど……

我は野守ならずや……熱き涙はほろ／＼とこぼれて、紫いろ濃き莖
にやどりぬ。囀る小鳥、笑ふ花、あゝ、それよ、彼れが半生の生命
なりしを。今は……

(久保天髓)

○十六夜

主人なる夜會卷の君、取り散らしたるかるたまさぐりつゝ、ほゝ笑
みて一同を見まはし、源平のおん争ひはやめ玉へ、今日のまとの
終りにのぞみて、何にまれ常々己が心々に美しと感じたる事どもの
べて見玉へ、をかしう待らんと玉ふ、満山の花に埋もれて、夢よ
り淡きあは朧夜の月こそといふに、其よりも鏡のやうなる秋の月と小聲
にいふ人あり、いな秋の月は美はしと申さんより、清しと申さんか

さながら
源語の雨
夜のしな
さだめを
讀むこと
ちせらる
艶なりや
麗なりや

おもしろ
き見付け
どころな
るかな、
繪さかし
のそれの
やうに

たふさはしかるべし、をのれは緑滴る青葉の蔭に、マルセイユの國
歌など、調べ清うにうたひ澄したるなどぞこよなうといふは、ミュ
ージックに熱心なる君なり、今の代の詩人のもともめづる白百合、
ゆかりの色なるバイオレット、あるは夕日に匂ふローズの花の、雨
の名どりの露こぼるゝ様を、といふは竹柏の下道いや深う辿り玉へ
る君なり、さらば小雨名どりなう晴れたるあした、とく庭のあたり
見玉へ、何よりも何よりも美はしきもの侍らん、あてゝ見玉へと主
人の君、まぶしげにランプ見上げ玉ふ、何にかあらんと人々首かた
むくるもをかし、そはくもの新巢に白玉かゝりたるをこそ、さなり
さなりよくもあて給ひし、己れは之にまさりたるものあらじと思ひ

夕陽落日
はどもに
美に入り
けるに、
何とて朝
日の美に
はたゝね
られぬに
や

侍り、こは又珍らかなるかん好み哉、凡そ天つ地のあらゆる美の中
なる美を申さば、大海の波に沈む夕陽にこそ、人々は如何に思し給
ふと、カアベットに涙うたせて膝進まず、己れは未だ海といふもの
夢にだも見しも侍らず、されば彼れこれと申さん事、あるまじきわ
さなれど、眞の美は深山の落日のかたにぞ侍らん、とまめだちてあ
げつらふ、山は山海は海、何れも劣りまさりなき尊き自然の美を、
汚れたる塵の子の兎や角と評さん恐しうこそ、我等にふさはしき物
語り何か侍らん、そよ、昔より今に至るまでの人の上を申し侍らん
己れは平家の末路をもて、美の極みと定め侍りといふに、骨牌に平
氏となりて敗れたる君、見苦しや内府宗盛殿の御最後といふは、源

この美の
争ひはな
かくに
世の常な
らぬ美は
しき團樂
を偲はる

氏の勝ちを占めし君なり、扇の前に舞ひすましたる侍をば、無慘や
與一は射通し侍りし、げに東江びすの品下れる、申すもなかくに
こそと、前の君打ち消す、さらば君よ、九郎おん曹子が五條橋の月
にあてがれし笛の音はいかにくとは、笑む否とよさつ摩の守は鎧
の引合詠草持ち給ひ侍りしよ、源太が箴の梅も、無官の太夫が薄げ
はひには、いかでくと、常には物多くの給はぬ君の、まじめに争
ひ給ふを人々をかしがる、こは又赤と白とのおん争ひとなり侍りし
哉、此争ひは次の會にさばき侍らん、これびはわが申す事論じ給へ
そは別れといふ事よ、いざくと夜會の君のたまふ、そは悲みの極
みに侍るをと怨む、否とよ、悲と申さは悲くもあるべけれど、うつ

清少納言
の箴を掲
げしむか
しを思は
る

りゆく代に別れあればこそ、人の世は美はしう侍れ、うとましかり
しはらから友垣も、別れては逢ひたしと思ふ美はしき念も起り侍り
且つ別れは逢ふの始めと承はり侍れば、別れありてこそ回顧の樂み
も侍るなれ、しばしの別れならばさも侍らん、永き別れはいかに、
あないみじ、そは死に侍らずや、さなり死よ、女詩人サツプオーの
死をば如何に評し給ふ、詩人の戀は詩人ならでは得解き侍らじ、こ
は詩人の君より始め給へといふ時、君は早くも、ゑんのすだれ高う
まさあげて、赤うなりたり山の端の月よ月よとさし招き給へり、げ
に今宵は十六夜よ、其燈火消してよとあるじの君のたまふ。

▲をだまさ

靜御前の
知己とい
ふべきに
や

浪の露に
おふる女
郎花の

色ほあせ
ざる君や
美しくし

世が世で
あれほど
いふさま
を見るが
如し

積もる深雪は七重八重

ほさむ光のかげくらく

かさなるうきの敷々を

身にまとひつゝ只獨り

峰のしら雪踏みわけて

つもれくゝと里の子が

持し我身も今日はかく

つゝむ袂にふりかゝる

とけぬ操はさかき葉の

ながるゝ水の岩こゑて

ふるさと寒く袖ぬれて

繁るみどりの松ヶ枝に

おほふ事難きあゝみのを

馴れぬ山道を右ひたり

入りにし人の跡とめつ

うたふ心はきのふまで

共に消ぬなん憂き思ひ

涙のつゆにそでひちと

木の下がくよしの川

妹と脊の山へだつとも

この身にまとふまひ衣

憂きくるしみ餘所にして

今をむかしに解もどす

獨り音を鳴くつるが岡

したふ心はなよ竹の

鎌倉やまにたつかせの

赤き心を身にそへて

あせざるいろや千歳まで

かみも諸共きりはらひ

夫のあとゝふ心根と

ほころびしとも同胞の

樂しむ御心はかなしや

すべも荒磯のあし陰に

かへすたもとに我夫を

たゆまぬ節の千尋まで

嵐にちるやもみぢ葉の

獨り枯れ野の女郎花

涙をつゝむすみ染めの

むすふいはりの水おとに

共にかはらぬ靜前

聲調優雅
なること
鶯語の宛
轉たるが
如し

鶯の心根
こそ、遊
ふ万斛の
怨みを解
くぞかし

○鶯のかもひ

春は來りぬ、我等が世とはなりぬ、花や待つらむに、いざ、樂しき世をおとづれむ、いつまでか、深やまの奥にくづ折れ居るべきやと我が希望の光にかられて、天氣いとほがらかなる朝、谷間を出で人里へと旅立ちぬ。

薄紫の霞の幕は野を蔽ひ、山を包みてほもいはれぬながめなるに、今しも東の山の端出し長閑なる朝日の光、其のいろの深紅は霞の紫に混じて、なべての物を彩りたる様、實にたとふべき言葉もあらず我はく、みも心も跳るばかりなるに、一聲「ホ、」とうたひかけしが喉つまり、舌かたまりて、調いと亂れたり、我はさながら、少女

自ら不審
がるどこ
ろに、お
のづから
なる樂し
みはある
なれ

が初めて人中に出でし時も、かくとばかり、いと耻かしく覺ぬ。やがて、和かなる朝風をよくと吹きくるまゝに、霞の幕は徐に音無く東より西に開かれて、緑の麥生、黄金色の菜畑、其の間を流れるいさゝ小川、さては炊烟立ちのぼる茅屋、其の家蔭にさしる水車等、いよ／＼あらは／＼になり行くさま、實に、生もなく、靈もなく、唯徒らに並び立てられたる物質としても思はれず。

餘りのく嬉しさに、われは、再び「ホメケキヨ」と叫びぬ、あな、こたびは節、調ひて、しらべなだらかに、音色もいと妙にして、わが喉より出でたりしが、はた他より起りたるか、何れ大なる、たくみのわざなりと覺ぬ。

真に君が
樂園なる
かな

このあた
り、寓意
なにとも
深し

われはく身も心もそゞろなるに、一聲、また一聲と謳ひつゝ、木
木の梢こすえとつたひ行けば、真白ましろき櫻へひならぬ香、椿の花の妙なる、
はた、屈曲おのづか自らなる枝ぶり、花瓣くわべんわざとなりぬ色つやなど、實にい
と妙に、いと巧たくみにして、此世は、我等が爲に開かれたる自然の樂園
に外ならぬやうなり。
あゝ、われはくひねもす樂しき春の歌を謳ひて、大なる惠の徳を
たへなむ、わが春のあらんかぎりを……
わが形はいと小さく、私聲わがはいとかすかにて、荒わしの羽風の音に、
もろ鳥をおそれしむ勢無けれど、目に得ぬ鬼神を泣かしめ、猛き
ものゝ心の心をも慰むる信まことなからむや。

君がひと
聲は、よ
くわが嘆
きをなぐ
さめ、わ
が恨みを
どけり

有情と無
情との間
いひ盡さ
せぬ趣き
あり

あはれ人の子よ、嘆なげきなど、なけきあらんものは、わが歌のをかし
き節ふしをさけ、さらばく、心に慰めあらん、あはれ、人の子よ、恨
みなそ、うらみあらんものは、わが轉まへの清き聲音こわねをさけな、さらば
く心おのづから平かならん。

▲星の露

夕とばりを洩れ出でゝ

かどやく星の輝めさや

風はるかより吹下りて

草葉くさばにきよきつゆのたま

茂る小草せむぎの葉の上に

有情うじやうの光りあふれつゝ

澄すむはそれかやるりの空そら

星が秘ひめごとさゝやけば

星と露とはむすびたり

愛の光りはうつされて

まさしく
星の情、
まさしく
露の情

をかしき
詩材かな
いみじき
心根かな

うす紫のいろたゝへ

みそらに光り美はしき

下界に凝りし清らけき

嗚呼その星を仰ぎ見よ

悲哀、歡樂さまぐの

▲少 女

まき繪のすどり美しき

乞ふまゝやがて與しが

ふたはと問へば蓋は猶

母のかたみのすどり箱

生れいでたり露のたま

またく星に啓示あり

しづくの露に理想あり

あゝその露を掬ひみよ

くしき運命を悟りなん

蓋を貸してと妹の

返さずなりぬ何時迄も

貸したまれと俯むけり

損れなばなんとせむ

ある日ひそかに渠が室

片頬を見せてすやくくと

蓋にはみごと紅白の

花の底にはひとひらの

のぞいて見れば眞白なる

春のひる寝の罪なさよ

摘みたる花のうづたかく

母のしや眞ぞうづみたる

○同情

同情の神

愛情の神

なつかしからずや、ナイチンゲール女史、尊からずや、ナイチンゲール女史。

小さき人形にはどこし、繙帯、小さき犬猫にはどこし、介抱、しる

ナイチル
ゲールを
起して、
この同情
を見せた
きものよ

我が國の
貴女は、
實にこの
幾多のナ
イチンゲ
ールに優
れるぞか
しこき

人や知りけむ、やがて幾十万の益良武夫にはどこすべき、緇帶介抱
のきざしなりしよ。

あはれ、黒雲暗憺たりしクリミヤの修羅場裡に、かどやきたりし一
点の光、誰が手に成りし何の光ぞ、云はずもがな、同情の神なる女
史が手のあたゝかき光なるよ。あゝ、此光を手に、白衣白帽のけだ
かきいでたちにて立てる姿は、いたでに◎やむ武夫等が目には、い
かに映じけん、神か、あらぬか、はた天使か。あゝ、同情の神、あ
ゝ、愛情の神。

あはれ、今や古今にまれなるシベリヤの大修羅の巷に、第二のナイ
チンゲールとしてあらはるゝ人や誰れ。第二の暖き光をかどやかす

人や誰れ。(なざ)

〇て ふ

この趣き
を常に
見ながら
も、いひ
出づるは
まれなれ
や

さびしいかな、夕ぐれの墓畔
白露いとよおもげに、手向の萩にかきて、枝もたわゝになやめるが
如きさま、骨にまでしみつ。苔むせる石碑には、無言のさとしあり
て、われは、唯何となく涙こぼるゝをおぼぬ、此時かたはらの小
路より、白き蝶、羽力なげに飛び來りて、墓前の花によりそはんと
せしが、そよ吹く風に、露のはら〜とこぼるゝおどろきたてや、
またいづこへか飛び去りて、かげもみぬす。
あゝ、心よわき蝶よ、汝が其のよわき羽もて、いづちまでゆかんと

薄命の蝶
よ、汝が
ためには
得がたき
の知己

する、おそろしや、松の小枝には、さゝやかに網をはりて、よき餌
かゝれかしとまらつる敵あるを忘れたりや。森かげの小川をわたる
夕の風は、汝が羽うごきもぬぬまでつめたきを知らずや。あゝ、ゆ
くをやめよ。しかず、かへつて、靜にこゝにねむらむには。
此の萩の香と甘き露とは、おどろける汝が身を慰むるに足らん、も
しまた、此の花の床に、冷めたき夜半の月にぬたへで、はかなくな
るとも、墓の前を若き繪師の過ぐる時、繪筆とりて、汝があはれの
さまを吊ふべし、若しまた詩人のさまよひ來らんときは、汝が運命
のはかなきに、清き涙をそぐならめ。あゝ、汝がねむるには、こゝ
こそ安すけれ、あゝ、汝が死するには、こゝこそ榮えあれ。

この鐘に
汝が無常
を申らは
むかし

されど、胡蝶は遂にかへらざりき。
はかめぐる草むら、そとろに虫はなきいでぬ。我思ひ、沈みに沈
みゆきて、目をとちてうごかぬことしはし。薄霧はわれをつゝみて
日は全く暮れたり。さらば、いざかへらんと、たちてあゆみおこせ
ば、うしろの方、山寺の鐘は、細う、長う、ひゞき渡りつゝ

（小糸）

涙を花に
比して、
そが露と
靨くあた
り、いか

人の情の種子とならば
或はべにゝむらさきに
それは野の花と號くべし
涙は花とさきぬべし
やがて縁りにかゝやかば
歩みつかれし世の人よ
青野にはなの精をすへ

青野にはなの精をすへ

に妙なる
想にやあ
らむ

かくあり
たきに、
あられぬ
こそ涙な
りける

黄蘗はたとへ味なくも

そは戀つ花うるはしき

とけて流れて君が身の

忽ち玉とやかかゝやかん

細さかひなやとことばの

甘さに人のたまを呼ぶ

さわれ縁のかげにして

思ふもとほき天のくに

清きに人のいのちつながむ

▲きぬいと

露は甘さにかをるべし

露はなみだの一しづく

髓ずいの細さにそゝぎなば

あるひは脆もろき世の運命

平和のかげの實となりて

蜜のしづくとなりぬべし

白さやわ手に解とれせば

五彩亂るゝ時となりて

(田中
傑文)

墨子の糸
になきし
もこのこ
とわりか

然り然り

白さむらさき紅くれなゐの

とけぬうらみを戀と云いひ

もとよりこひの色なれば

もとよりあひの糸なれば

たゞその眉いその響いそむとき

手繰たぐりよせつるきぬ糸は

あゝ思へかし人の世の

一度ひとたびかくて亂みだるれば

○金水仙

ひざに亂みだるゝきぬの糸

みだれの色を愛といふ。

つひに淡うすきを如何いかにせむ

つひに弱いきを奈いかにせむ。

たゞその指ゆびの觸ふるとき

あやしく胸むねに巻まれたり。

すべてのものは糸いとの如ごと

つひに解とけぬを奈いかにせむ。

金水仙の
なつかしの君よ、戀ひしの君よ。

よく語を
解したら
んには、
いかに答
ふべけん

かく詩材
となりて
は、花も
満足を表
すべきな
れ

君が御情にたまひし金水仙の花は、あゝ、高き香をわが文札ぶんせつに投げ
ぬ。幽闇いんあんと陰鬱いんうつとの身にせまる今宵こよみしも、一人その花の清さを眺め
て、双の腕うで拱まねきつ。嗚呼。われはそも、何をか思ひ、何をか感じつ
らん。……そよ、慕はしき君が御蔭、おぼろならずこの眼に。……
そよ、なつかしの君が御聲、ひくからずこの耳に。……オ、君よ
許しませ、暫しこのちさき魂の、君が御あたりにはさまよふを。
歌あれとたまひしこの金水仙の、高き香りに、はた黄色の色美しさ
に、すゞろ、胸は戀々れんれんの情に驅かられて、歌も詠よまず、詩も賦し得
ず、只々この花送りまし、君のみぞ忍ばる。春雨はるさめしとよなるに、静
けさまさるこの宵を、オ、君は、バイオリン肩に、……双の振ゆ

その心根
のやさし
さ、さて
もその人
はいかな
る心もて
受けしに
や

るがせて彈ひきまさん曲は「ローレライ」か「須磨」か。……只一度
只一度、その音聞きまつりたさの心切なるを、あはれみたまへ。
こゝに封せし花は、春風あたゝかき朝に、三日月細き夕ゆふべに、わがち
さき詩材たるもの。やさしき詩材あふるゝ君にしも、このふかき心
こめてまわらするを。……花のいろく異かはれど、こもる心は只この
わが胸一つ。……花の色はあするとも、香は失するとも、送りし人
は、昨日きのうも、今日けふも、さては明日あすも、あらず百年千年まで、變かはらざ
ると知ろしめせ。
ふかきこがねの花びらに、無言むごんのさとしをこめて、ほそき葉に、神
秘をひそめて笑めるこの金水仙。あゝ、送りし君のやさしき、美は

これやこの少女の戀やまさしく詩なれ

語は短かけれど、その自然は腹なるものぞ

しき、御心そのまゝならずや。さても、なつかしの君よ、戀ひしの君よ。

○少女の初戀

なまめき立つる春の花 つばみの姿あいらしく
つゆに心をなびかれて 誰にか焦るあだざくら
おほかる野邊に咲揃ひ 花の面かげしたはしく
風のためよりに誘はれて 結べぬ糸のくさまくら

○白すみれ

猿が叫ぶ片山里、田の間を流るゝ清いゝ小川の柳の下に、底の石を敷へ乍ら衣服を洗つて居る少女。

ふと見ると、戀にはなれたるものであるか、浮きつ、沈みつ、流れ來た一輪の白すみれ、少女はそを取り上げて、紅匂ふ唇にふれて、涼しさうな浴衣の襟にさした。

○若き怒

七草千草の花美しや、路に堤に丘に春の艶。男尊女卑の世をすねて、涙に脆き獨身のツクシといふ形管女性の詩人もあるものを、ヨメナはいつ誰と妹脊の契をや結びけむ。あゝされど、口紅いやしきゲングの醜女も戀は知る、しとやかなる銀杏がへしの村娘、名はタンポ、といふ、此でろの襦袢にやつるゝ姿の哀れさよ、光澤やかなる黒の靴に、紫の袴の裾を匂はせて、今様の花

形容と、言葉のいひまわし筆のほこびともいとをかし

嬌慵の極
痴に入る

月巻とや花すみれ、詠まむとすれど歌はならず、玉章たまづさに書認むる筆
の墨もにじみて最いと口惜くちおし、絶たぬ思は千々に碎け、胸の小琴せごの
絲か搔かき亂れて。

蒼褪あせめし唇か噛かみしめて悲めども、甲斐なきものは若き春の怒か、あ
ゝ、この若き怒をいかにせむ。

希こひねがはくば、自然の神もみそなはせ。妾まごが聖さきき戀こを。(今宵けふ 静子)

▲土 筆

同じ春野に生まひ立ちて

色美しきたんばゝの

姿あらねばにはひよき

すみれの花の榮はなもなく。

汚けがれしものと世を人を

はなれてかこつ山僧さんそうの

この結あ
りて、竿

頭に一步
を進むと
いふべし

聖なる姿さながらに

春をすねたる土筆つんくし

清きき小川のきしにして

戀こにしばれて流れる

花はなを迎へつ見送りつ

悟り顔にも經を誦すらむ。

○古 鏡

罪？ さなり、そは罪なるべし、さあれ、あまり訝あやしき手箱てぶくろごと、

庵主の君のあらぬ折に、吾はそと取り出でぬ。

秘められたるは何ぞ？ 許せとばかり、紫の組紐解けば、それよ高

詩繪ましえに黄金の狂獅子くるひし美しき鏡箱の、開く手も戦おのく、塵も止めぬ明光くわう

々たる鏡の一枚。

哀れ、かつては緋桃ひとう零る、寮の夜を、紫薰むらゆる銀燭の影に、春は二

破鏡なら
ぬ古鏡の

實に罪な
り、また
忘れにし
人の懐なごひ
を擾さわすも
のぞ

なげきは
そもい
なる運命
なるや知
らず、こ
れ何等の
恨ぞ

八の眉美しう、臙脂恥しの優姿うつせし身の、さても辛き運命や、
戀なき息吹に經机曇らせて、墨染の袖に、水晶の珠數つまぐらんと
かくて、昔の戀の忘れ形見ぞと、鏡は深う秘められしが、門には尼
や歸りませる、花手桶さげて、念佛の聲も清々しう。 (澤田霞溪)

○櫻月夜

實に美は
しき春の
夜や、お
ぼろく
の月影浴
びて、花
下にさま

いきは人去り、雪洞も大方消ぬ失せて、賑はひし後の一しは静けき
櫻月夜を、唯だ一人夢と逍遙ふ麗人がゐた。そは花より外の祇園の
花！ けれどもその姿いぢらしくも淋しげに、月の光を浴びた顔は
蒼白めてゐる、若し秋の月でももあつたなら、パツチリした目に涙
が浮むで見えたかも知れぬ。

ふ若き
身の戀な
ればこそ
みな美は
しけれ

花下の麗人！ 何を憫むでゐるのであらう？
折りしも風なきに、花の垂枝の揺くかと思ふ間疾しや、ポツキトと
手折る音がする、残んの雪洞、パツと燃ぬ上つた途端、ちらと姿を
見せたのは、立札に身を隠してゐたやさしの花盗人！

この花盗
人こそ可
憐なれ

『エツ春雄様……』と叫びて麗人は氣も狂はしく、
『春雄様、そ、その容は……』と涙にむせびつゝ近よつた時、櫻花を
かざす青道心の、姿は智恩院の門に隠れた。

▲邂逅

邂逅の情
いひ得て
言外にあ
ふる

花にたはるゝたをやめは 都大路におほけれど
月にうかるゝ小女子は 鄙の片戸にさはなれど。

天隨氏の
作ほどあ
りて、そ
の言葉た
くみなる
はさてお
き、いひ
まわしの
をかしぎ
美しども
うつくし

わが世の春の朝ばらけ

さへげむ人のあらざれば

悪魔はわらひ龍いかる

愛の天使のこゑならで

生ける同じ人の世に

縁えにしの奇しき無かりせば

にはふは花か花よりも

まだうら若き君が身の

まよふ心のゆめうつゝ

げにもやさしき小羊の

おもひあふむ心根を

ひとり影をば描えがきつゝ。

愁ひのふちに臨みては

たれか闇世やみよをさますべき。

いくその人が相知れる

いかで一樹かたの蔭に見む。

すめるは月か月よりも

罪と穢れに染まざれば。

われなまじに寄り添ふ面影は

情をふくむそのまみよ。

蝶は蝶とし群れて飛び

あゝ寂寥さびしさは生ける身に

あはれみ玉へ塵の子の

一たび君を見てしより

鳥は鳥としならば棲む

力を添へむよしもなし。

世よに伴とももなき此身なり

希望を得たる我身なり。

○文 使 ひ

綾子さんは甚ごう麼して妾をあんなに可愛がつて下されたのだらう、妾

も何となく、慕はしい氣がして、眞まことんの姉さんのやうに思はれたが

……○

月朧なごの或る晩であつた、小提灯に照らし乍ら、お庭口からハラ／＼

と散る櫻の下を潜くぐつて、あの御居間の窓の下で、「綾子さん」と小聲

櫻ちる朧
月夜に提
灯さげて
祕密の文
使ひは、
ちと大膽
に過ぐる
やうにし

て、而かも何事も知らぬ少女なれば罪なく美はし。吾れも亦この少女のため二人の戀長かれと神に祈らん

で曰つたら、「美代ちゃん？」と御返事があつた、窓がぎいと明いて御顔が半分……泣て居らしつたのかしら……御眼の縁がホンノリ腫れて、赤く提灯に映る、ほつれ髪が白い頬に戦ひだ時の、あの美しくかつたこと、そして妾は、兄さんのお手紙を渡した、が……其事があつてから三日目、あゝ此水清い片山里には、兄さんの影も綾子さんの影も見えなくなつた、……櫻はもう三度咲いて散つたに、今は何處を漂泊つて居るのやら、御達者かしら、若しや……吁。淋しい妾の心には、せめてお二人の身の幸あれとのみ。(鈴木桃孫)

○小品三題

花盗人

僕が春のくれゆく夕！ 風なきに二ひら三ひら、散りくる梅樹の下に佇みて、靜かに春の歌を吟じて居ると、突然ひくき垣根の上から小さき手を出し梅の小枝を手折つて、ゆく者があるので、「こらつ」と、追かけ垣根を出て見ると、花盗人は、春の女神のやうな美少女で、花にキッスを與へつゝ行く姿は、僕をして、「おい待てー」と云はしめないのみか、亦も、花盗に來れよとまで、思はしめたのだ！。

天の星より

天の星は美しくしう候、地の花もまた麗艶しく候。海の眞珠は更に清

癖を戒む花を盗むやうな花に、ほれるなから

所謂理想
の戀人な
るい

らかに候。

あはれ、それにもまして美しくしき優しき、情なり、慰藉あるは、戀
しきなつかしき君にて候ふよ。(住友 とき)

泣かぬ妾

夏楓と答
へて嫁の
涙かな

妾は泣かなかつた、實際妾は泣かなかつた、妾は泣きたかつたけれ
ども泣かなかつた、それは、舅さんや、姑さんが、妾の傍に居たか
らであつた、舅さんや姑さんが、妾の傍に居なかつたら、妾は如何
に泣いたでせう。(すゞ木 しゆん)

ゆかしい心

日頃なつかしき友よりの書面、やれ嬉しやと、手ばやく封きつて讀

この莖、
能く語る
ならん

ひ中、ばさつと音して落ちた小さな紙包、開きみれば、ゆかしい莖
の花弁、わたしは思はず、花を掌てのひらにのせて、しばし遠き友を忍ぶの
であつた。(飯塚 きを子)

▲歌の一ふし

戦々尾花にゆめさめて

映らふ花に里の子が

しろがね敷けるさゝ川に

一路の悲風音も細う

我もならはぬ假初の

三年わびしき山守や

野駒いなしく荒原の

何をおもひのたゝすまひ

流るゝそこの彩雲は

やがて消ゆるか秋の夕

戀にあはれを知り初て

虫と夜寒をかこちつゝ

情あり景
あり、眞
の詩か眞
の詩

野の景を
寫せしこ
まうつく
し

風にかのゝき雨に伏し
解けぬなやみの絡りて
あまり思ひの苦しさに
天の帳を切りさきて

思ひに細る草の扉に
空しく朽ちむ運命かも
高誦すうたの一節は
袖のしづくに月の影

○美音

吾は今、野の道の夕に立てり。

夕雲雀空より麥生に落ちぬ。

旅の僧、春の日長を行きつかれて、やゝ杖重げに夕日にたゞる野の
道、暫したちとまりて笠を斜に眺むるを、風と共にかすめて過ぐる
夕燕、草を渡つて響く鐘の音の無常とや告げけん僧は急ぎぬ。鐘は

子守子の
眞情見は
てをかし

餘韻かすかに、暮の色漸く山の麓より来る。

「ねんねー ねんねー 小兒子よー 歸つたら御膝で乳やろう」

子守子の唄ひつゝ遠きより来る。

夕霞こめ來り遠き方にも、近き森陰、丘の彼方にも、ゆるく立ちの
ぼる夕の炊煙、さらめきそむる燈火の光、あゝ平和なる村よ民よ。
はや母上も畑より歸りたまひつらんほどに、とく歸りて乳あたへん
と、背なる子を一揺りゆり上げつ、漸く黒づみ來る暮靄の中に光る
灯を見とめつゝ、急ぎ足に歸る子守娘の、心樂しげなるかな。晒の
手拭眉深に、紅の襷かひくしき姿、日入りし方の山の端に、鴉の
飛び行くを仰ぎ眺めつゝ、母上はやや、夕餉の支度を了りて、吾等

背なる子
を一揺り
ゆり上げ
つの一旬
は千金

このあた
り何ん
もいは
ぬさま
なり

何等の快
事

田舎樂事
これに優
れるはな
し

の歸るを待ち給ふらん、背の君よ、いざ歸り給はずやと言ふ、若き
夫も鋏の手を止めて、然なり、はや仕舞はんと答へつゝ、相見て樂
しきはゝるみ、女は、長閑なる麥生の空高く鳴く雲雀や、紅の蓮華
草、黃の菜の花に、ひらく飛ぶ胡蝶を下物に、晝餉せしをり呑み
し、土瓶の茶の殘餘をすて、右手にさゝげ、手拭よりもる、鬢の毛
をかきあげて、二挺の鋏を肩にしつゝ先立つ夫につゞきぬ。斯くて
美音は野に響く

仇な櫻の一枝よりも

直な松葉の末長く……

▲悩める人よ

慰藉のう
たを聞き
て却つて
罪をます
ことなき
やいかに

時は過去をぬすみ去り

うれひの淵に沈みたる

うつはり多き世の中に

むしろ深山に斧をふれ

自然の文はとことばに

歸りて妻が笑顔見つゝ

來れ罪の子悩めるひと

とはの慰安は山里ぞ

理想はゆきて水のごと

悩める人よ罪の子よ。

かりの名榮は何なるぞ

額にあせして鋤をとれ。

汝を慰む野に山に

濁り酒くむ快やいかに。

自然美情美は山里ぞ

罪の子來れ悩める人。

(西澤雪洲)

○川柳管見

一種の川柳眼ありといふべし、俳句をおとし過ぎ、川柳を揚げすぎた處は、首旨し難けれど、今の一種高尚々々といふ寫實派を斥けて川柳の特色は滑稽

に在りといふは同感なり、川柳は一種、さばけた、砕けた趣味あり。俳句は、幽玄にして韻致あるが取柄也妄に軒輕すべからず。とは大町桂月

川柳とは何ぞを解決して置くが、評するにも作るにも肝心。ザツクハランに『笑はせる十七字詩』と解す。『可笑味』を與へないものは川柳に成つて居ない。可笑味といふても、下劣卑猥は何うしても排斥せねばならぬ。要するに『輕妙』『洒落』『可笑味』『滑稽』『穿ち』『諷刺』『くすぐり』等が、川柳の本領、且つ川柳以外韻文に依つて表し得ない所が川柳獨特の異彩。又滑稽的『嘲弄』か川柳の特长で、其強勢なのが氣味の好い『罵倒』である。川柳眼を以て社會を觀れば滑稽事が多いから、縦横に切り廻るが川柳の超然たる所。而して一讀誰にも解し得る通俗的たる事が川柳の特色、六ヶ敷い解し難いものは何でも好ましく無いが、川柳は尙更大禁物、川柳を以て一旗擧げ様

とする者は、在來の滑稽詩には満足せず、則ち古人の糟糠を嘗め、陳套を脱しないでは、韻文に圭角を認められ無い、且つ先程迄川柳は卑猥下司趣味で、口にするも耻ぢと誤かいして居た餘波もあれば目先の變つた事をしやうと、一筋に高尚々々と新奇を衒ふのは、其抱負は敬すべしだが、其處置が宜しきを得ないでは却て難有迷惑。高尚優美を表はし度くば、レッキとして俳句があるではないか、高尚の中にも可笑味が添はれれば、それこそ川柳の上乗で、可笑味が無ければ、川柳としては三文の價値もない。可笑味にも上品、愛嬌美しいものは川柳の秀句。例を擧げれば、元祿時代に流行した前句附の中に、

翁の評な
り、いか
にもいか
にも

丸くて四角長し短し

の後の句即ち川柳の題に附けた前の句に

●丸盆に豆腐半挺持つちんば
●月をくむ重ね井筒の縄釣瓶

の二句を比べたら如何か分らう。古來人口に膾炙し、雑談に持出され、文中に引出されて一種の興味有る川柳を列擧して、愚感を叩き出さう。

●大男總身に智慧が廻りかね

皮肉。思ひ付き妙。此句にかけては大男も黽なまられ、嫁の姑に於ける感がある。しゆとは死ぬが川柳は死な無い、思ひ茲に至れば、川柳

もまんざら馬鹿に出来ぬ。

●鶏があくびをしたとつんば言ひ

奇警滑稽。聲が出ないで欠伸あくびを思ふのではない、己の聾つんばな事を忘れて了つたからだ、婉曲に諷刺に詠向。

よくある
景趣なり

●驅けて来た程に娘の用はなし

平淡な所、却てお轉婆てんばを穿うがち得て妙。

●白狀を娘は乳母にして貰ひ

お醫者さんでも草津の湯でも、癒らぬふらく病に罹り、内氣な娘は誰にも話さぬ、羞はづかしいから、併し仲好しの乳母うっぱには打明け、粹な乳母が親に相談する。『白狀』の字可笑味又適切、『して貰ひ』で愛嬌

乳母たる
も亦難い
かな

たッぶり。

●お美しかつた相だと後妻言ひ

先妻妬く後妻の言分。『お美しかつた相だ』で、わたし如きは比べ物になりませんでせうと、厭味いやみが十分表れて居る。こゝが川柳の川柳たる價值、妙味さ。

●よんどころなくとは後家のきついうそ

後家が二度の夫をもつ時の口實を嘲弄した句。『據所無く』が面白く、『さつら』で『嘘』が能く利いて居る。

●國の母うまれた文をだきあるき

『だき歩き』が面白く、娘の出産した報知で里のはゝが喜び手紙を持

つた儘家中を飛廻り、又親戚を駈廻つて知らせるとも見れば、親の情の言ふに言はれぬ美妙な所も悉く盡きて、他言を用せないのが川柳の特長。

●四五両ですめばおふくろ受出す氣

世話をやかせる放蕩息子ほど、また可愛いのははゝ親の情。愛情が如何に妙なものであるかと、此句で知り得られる。千万言の愛情論よりも柳句の方が價值がある。

●負け將棊逃げるたんびにお手は何

實景。見付け所、言ひ廻し、妙々。

●明日にでもそつとくればと飛車が成り

愛を誤るもの世間猶多し
後ろを見つゝ遁げ行く敗軍の兵も一般

親の死目
にも會は
ぬといふ
碁も同じ
こと

床屋で退屈凌ぎに將碁をして居ると、自分の番が漸う來た時遅し來
た時早しにし車が成り込んだ、もう面白くなつて止められず、人は
勝手さ、今迄さい促して居て『明日にでも』。將碁を知つて居る者で
なくば此句の味は解し兼ねる。名句は名句である。

●押へればすゝき離せばさりとくす

押へたら手の下には芒のみ、離せば直に其邊に望まをりがまた啼き出す意
今迄にこれ程稚量、幽邃、清寥、詩趣に充ちた美しい柳句は知らな
い、而も種々の寓意あり可笑味もありさ。俳句にだつて匹敵するも
のは無し。

●疊屋が野暮で簞笥をひよいとのけ

川柳とし
て見るべ
からず

『ひよい』と空簞笥をのけられては、さぞ冷汗も出やう『野暮』とも言
ひたからうが、疊屋は痛み入る事さ。

●居候三杯目にはそつと出し

『そつと』出しが能く利いて可笑し。『三杯目』で此句が活きて居る。
友人の宅で御馳走に預る時、居候ぢやあるまいし三杯目に遠慮しな
くともいふさと、皮肉を言はれ、だから五はい目だなどやるが、居
候には何うしても『三はい目』は動かされぬ。

●はめられて呉れた名をいふ雛の主

雛ひなを客に賞ほめられて、少女(ひなの主)は嬉し氣にこれは伯母さんに
貰つたの、それはお隣の姉さんに貰つたのよと、一々呉れた名を話

貧乏人は
これで困
る

相合雪隠
の長屋住
居は、多
くあるこ
と

す、少女にはあり相まうなこと、可愛らしい美しい佳い句である。

●人に物たゞやるにさへ下手があり

況いんや商賣いに於いてをやで、彼家は品も佳し價も安いが、お神さんが
劍突けんつだから、遠いけれど他家へ買ひに行くなどは能く聞く話此句万
事人情を穿ち得て、商人否吾人の座右の銘である。古池に蛙がとび
込む水の音がどんなか知らなくとも、此柳句は知つて置くが善い。

●雪隠へ先をこされて月をほめ

奇想妙々。せう事なしにふと仰向いて、あゝいゝ月だなど言ふ妙な
所のテレカクシ。先客が雪いんの中で聞いたら、尙更踏板踏んで可
笑しかるだらう。名句々々。

今は少な
くなれり
されど鐵
釘を利用
して文を
書くには
こまる

●うれしさは嬉しいけれど下女讀めず

それとなく艶書を利かした手腕妙、嬉しいやら悲しいやら、心情の
込入つた言得難い句。川柳ならでは。

●女房を叱り過して飯を焚き

そこの長屋の亭主がやり相な出来事。諷刺言外。

●仲直りもとの女房の聲になり

見付け所をかし。「もとの女房が」面白く、其聲深く響いて實景見る
やう、右二句夫婦喧嘩を滑稽化す。

●この家でうまれた内儀まけて居ず

婿むこを尻しりに敷く家附の娘、其意氣や當る可からずだ。「この家」の字何

でもない様で面白味がある。

●雪見には馬鹿と氣の付く處まで

『いそぢらば雪見に轉ふところまで』の芭蕉の句を罵倒した痛快極つた句。さうぢやないか、轉んで着物を汚し、身が凍ぬさうになり、此こゝ麼馬鹿なと氣の付いた處で歸ると云ふ、平凡な小供地味だ、これこそ馬鹿な事は。芭蕉の句を知らなくとも、意味明徹する所が此句の價值さ。

芭蕉は『初時雨猿も小籠を欲し氣なり』の句を吐いたから、伊藤政子氏が『そんならば芭蕉小籠をやればいゝ』と小言を頂戴する。俳句も川柳で滅茶苦茶に斬捨て御免をやられる様なものは作りたく無

いが、俳句は防衛的、川柳は攻戰的だから、終局永遠の勝利は川柳に軍扇が擧がり相だ。俳句の聖人も川柳にかけては、ぐうの音も出ない。さすれば或點に於て川柳は、俳句より超然優つて居ると言つても、無理算段の賞語では無い。さあ斯う漸く、川柳の味を知り趣味を解する様になつて來ると、もう俳句の沈趣味になる。人間は社會的であるから、自然の景を咏うた俳句よりも、社會人事風俗を滑稽化した川柳の方が餘程面白い、趣味が深い餘情が強くて多い。不景氣な芭蕉の句より、颯逸な超然的な一茶の句の方が感興を吾人に深く與へる。と示ふのは、つまり、一茶は川柳眼を以て居たからだぢやによつて俳句より川柳が盛に流行する時は遠くもあるまい。嗚

落花の雪
に戀人の
眉をかき
歌ふとい
ふ、何ぞ
美にして
哀しきや

呼、明治の川柳壇がこれからの視物である。

(中村靈外氏節録)

▲残雪

春の日の輪の美はしう
水に浮きくる花を見て
丸き山々むらさきに
一きは目だつ残るゆき
尾呂の鏡にうつし見て
きぬざる雪に墨つけて
甘きは戀の水なれば
酔ふて歌はん悲しさの

白石おほき加茂がはの
公卿のみ歌を偲ふかな
五重の塔は朱に榮ぬ
楠の大木の影にして
爪がたなせる回み地に
わが戀ふ君の眉からむ
せめては雪にはゝずりて
涙のうたを花の間に

(吉田花茗)

詩人の情
梅の紅ど
いづれか

▲紅梅のうたへる

晝の日光にさき出しが
石燈籠に灯も見ぬす
兄、白梅は世すね人
とき紅かほる人窓は
驚訪はぬあかつきは
雨ごとまざるわたゝみに
散り行く先ぞ涙なる。

春ぞた寒き庭なれば
夢はわびしき宵とや
詩にかくれし溪間や
戀のわが身にふさふとて
人の夢路をねたみつゝ
緋桃の春をうらやみて

好題

見ず識らずの花より送りし文と御あやしみ給ふは、もつとも次第

○蒲公英より胡蝶におくる

戀愛の情
いひ得て
いと新ら
しくおも
はる

引く手あ
またなれ
ば、蝶た
るものも

に侍れど、君戀ひてやるせなきわが思ひを泣く／＼かき侍り候文なれば、せめてあはれと御ながめ下されたく候。

きのふけふと、うら／＼かになり侍るを、櫻柳と錦を織り交へしこの野邊に、神の御使とはゑみ給ふ君がみ姿を見ては、鶯の初音よりげになつかしく、空に囀る雲雀の聲を聞かても、君を喜び迎ふる歌とあやしまれ、野路を縫ひ行くさ／＼川の水の流れさへきみが思ひをよする琴の調べと忍ばれ候、まして霞の衣を身にまとひつゝ、春の曲を舞ひ給ふろうたげたるかん姿は、いかなる詞も盡し難き程たふとくも又うるはしくこそ候へ、君が美しくしき翼にふれまほしとあらん限りの句を春風にかほらしをり候ものを、さるに君には白桃の木

いと忙し
うあるめ
れ

すみれの
妬みにあ
はんこと
を恐れて

妬み心あ
るからに
は、いよ
君には
宿らまし
ものぞ

陰に微笑^{ほくそ}める董の君をこよなくめで給ひ、日毎／＼音づれ給ふを見うけ候、されど岡邊に咲ける妾のこときは、一度も君がす／＼しきみ言葉にあすからず、只々音づれ給ふを今日か明日かと、日々に待ち焦れ居り候、あはれ蝶の君よ、妾の花に宿り給はぬは薫り薄きが爲めにか、さりとてはあまり心づよき業と恨みあげ候、妾とて幾枚かたゝむ黄色の花片には限りなき情を秘め居り候を、只管に嘆かれ候て熱き涙にむせぶのみに候。妾に比してすみれの君を思ひなば、咲きては君の寵を得、摘れては少女のあたゝかきみ手に抱かれ、いかばかりかうらやましく存せられ候、我が蝶の君よ、あさましき境遇をあはれともをばしめして、しばしの宿りをゆるし賜へ、思ひぬむに

これと思
ひのもつ
るゝもと
おなるら
め

せまりて、筆もつ手さへおぼつかなげに候かして

▲あこがれ

夢の狭霧に仄見にて

うすくれなわに詩の花

うまし香に酔ふ歡樂の

ふと我がこゑに目醒めしが

秀才うらやむあこがれや

運命をかこつなみだ川

さては溢れて堰こけて

詩のいづみに奔りけむ

硯の海におもひ溶き

夜寒を筆に噛みしめて

白紙にはほふ唐墨の

若き胸血の噪ぐかな

あこがれ
けるさま
を筆にい
はすこゝ
ろいと美
くし

現代の
美文の
星とすみれ終

明明明
治治治
卅卅卅
九九年
年八月
十月廿
五日
第發行
二刷

〔星之藁奥附〕
〔定價金廿五錢〕



著者 拈華散人
發行所 大阪市東區南久太郎町四丁目八十六番屋敷 武田福藏
印刷者 大阪市西區阿波座下通二丁目二三九番屋敷 河野圭藏

發兌
書肆

大阪市東區南久太郎町四丁目 武田交盛館
大阪市東區安土町四丁目 積善館本店
東京市神田區美土代町三丁目 富田文陽堂



20